

ポケットの中の英霊

ACT 07

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕のポケットには小さな英霊がいる。

邪ンヌと一緒にいろんなことをやったりやられたりのお話し。

目次

ACT01	ポケットの中の英霊	1
ACT02	狂いはじめ	12
ACT03	葛藤と覚悟	21
ACT04	聖杯戦争	31
ACT05	弓兵	42
ACT06	契約	52
ACT07	answer	63
ACT08	理想	74
ACT09	それぞれの思い	86

ACT01 ポケットの中の英霊

信じてくれないかもしれないけれど、僕の胸ポケットの中には小さな妖精がいる。

黒い鎧を体にまとい、綺麗なブロンド髪を揺らしながら何もかもを射抜くような金の瞳。

会った時は思わず魅入ってしまったのを今でも覚えている。

でも、初めて会ったときに契約書らしきものを手渡された時は苦笑いがこぼれたけど、少なくともそれは様式美に乗っ取ったことだろうから僕の口出しすることじゃない。

とても小さくて、性格が歪んでいて素直になれずに強気になっているけど、本当は今にも消え入りそうなほど弱弱しくてそれでいて極稀に見せるとてもかわいらしい姿の小さな妖精。

そんな妖精を僕は守っていきたいと思うんだ。

少し自分勝手だって？　でも。思うことは自由だよ、アヴェンジャー。

誰も信じてくれるとは思えないが私は身体はどういうことか本来あるべき姿ではない。

本来召喚されることの無いアヴェンジャーとしての召喚。ついでこのココエースよろしくぐだぐだな絵面になってるこの体。

なんでこんな残念な体になってしまったのかしら。本来の身長の何分の一スケールよ。

私が召喚されたのは今から10年前ね。

10年よ！　10年たってもこの変わらぬ姿をしてるのよ!?

何ですって。誰がココンよ。たしかに、あれも10年、いや20年たってるけど姿が変わらないから不思議に思ったことはあるけど、そ

れとこれは関係ないじゃない！

それにこいつ。魔術師の血筋のくせして魔術を使ったところを見たことがない。

魔術回路はあるが私に言わせてみれば量B、質B+ってところかしら。宝の持ち腐れとはこのことね。

怨念、復讐、憎悪などの言葉が全く似合わない彼に召喚された私。そんな負の感情しかなかった私にいろんな世界を見せてくれたことには……素直に感謝してる。

そ、それでもほんの少しよ!?

すっかりしてるように見えてどこか間抜けで非情になりきれない彼。

そんな彼と一緒にいたいと思う私は少し、いやかなりおかしくなってますまっている。

やはり、召喚に応じなければよかったかしら？

何よ。私の顔に何かついてる？ 何でもないですって？ まったく……このバカときたら本当に……

これは小さな英霊と少し変わった少年と共に紡がれる、小さな物語。

ACT01 ポケットの中の英霊

2004年冬木市……

「寝過ごしたあああああああ！」

冬の少し寒さを感じる朝日を浴びながら平和な冬木市の坂道を自転車で風を切って走る。

「あの愉悦親子め……僕を遅刻させる為にわざわざ起こさないなんて人が悪いにもほどがある」

愚痴を溢しながら猛スピードで自転車をこぐ。

「私は何度も起こしましたよ。それでも起きない貴方が悪い」

僕の胸ポケットからひよっこりと顔を出す僕の小さな相棒。

名前は、アヴェンジャー。

あ、本当にアヴェンジャーっていう名前じゃないらしくて別に名前があつてこれは偽名みたいものらしい。

「それにしてもアヴェンジャーの起こし方はすごいよね。僕の枕を燃やして火事を装わせるなんてさ」

本当にすごかった。いつもは鼻とか耳を炎であぶるとか腰に携えている剣とかでチクチクするぐらいだったのに、今朝に限っては枕を燃やされて本当に火事かと思つたよ。

「あ、あれは……そう。あなたがそろそろ鼻とか耳とか炙られるのに慣れてきたと思つたからよ」

そつぽを向いて苦し紛れな言い訳を言うアヴェンジャー。

ふふふ……僕は分かっているよ、アヴェンジャー。

君がいつも通り僕の耳たぶを炙ろうとして間違えて枕に引火してしまったことを。

「そうかー。炙られるのに慣れてきたからかー（棒読み）」

「そうよ！ な、慣れてきてると思つて——」

「慣れてきたからかー」

「……ふん。もう知らないわよ」

顔を真っ赤にして僕の胸ポケットに顔をうずくまるアヴェンジャー。

そうこうしているうちに僕の通う学校、穂群原学園に到着した。

駐輪所に自転車を乱雑に止め下足入れに下足を入れ2年目となり

アジの出てきた上履きを履き教室へ駆け込む。

「セーフ！」

「アウトオオオオオオオ！ スリーアウトチェンジ！ 後で職員室へ来なさい！」

僕が教室の戸を開けて手を大きく開いて野球のセーフのサインを出し、いかにも間に合った雰囲気をぶち壊された。

それが我らが担任、冬木の虎。タイガーこと藤村大河。

「先生。僕はアウトなんかじゃありません！ むしろセーフの類です！ まだチャイムはなつてません！」

「ダメですう。それを決めるのは、ここの教室の担任の私なんですう。」

変な踊りを僕の前で踊りながら言うタイガーが非常に腹立たしい。「でも遅刻してない僕に遅刻という名の冤罪を着せるんですか!?!」

その姿は他者から見れば無実を証明する罪人のように見える。

「それなら聞けけれど、君。今日で遅刻は何回目？ ほれほれ、答えてみないか」

「うぐっ……39回——」

「ぞんねーん！ 46回目でしたら！」

くそっ。さばを読みすぎたか。

「とういうわけで放課後に職員室によりなさい。わかった？」

「わかりました……」

僕の負けだ……。

重い足取りで自分の席に着く。
「あなたも相変わらず飽きないわね。少しは直したらどうなの？ その遅刻癖」

胸ポケットからアヴェンジャーがぼやく。

「いや、毎日何もタイガーもタイガーで少しくらいは見逃してくれども罰は当たらないと思うんだけど……」

胸ポケットがつぶれないように机につっぷす僕。

はあー。と、ため息が盛大に漏れる。

実を言うと僕とタイガーは毎朝あやっつて言い争っている。

これがなにかとこのクラスの毎日の日課と化してゐるらしくこれを見ない日は何かあるんじゃないかというへんな予兆ともいわれてる。解せぬ。

「お前も飽きないよな。藤ねえ、じゃなくて藤村先生と朝からあんな感じで言い合う人なんてそうそういないのにさ」

隣から声が聞こえ、突つ伏した状態で首だけを向ける。

「衛宮。僕は好きで毎朝ああやってタイガーと言いつてると思う？」

声をかけたのは『穂群原のブラウニー』やら『ばかスパナ』など数々のあだ名を持つ赤銅色の髪をしている衛宮士郎。

彼の料理は本当にうまい。時々、おすそわけで卵焼きやら照り焼きなどをいただくことがあるがそれが本当に美味しく僕の胃袋に収まるはずのものが、僕の養父たる愉悦神父の言峰綺礼とその血を受け継いでいるカレン、そして居候の自称王様の胃袋に収まりそのたびに枕を濡らしているわけだが……。

「それとこの前に鰯の照り焼き、どうだった？ 自信作んだけどさ、感想を聞かせてほしいんだが——その様子を見るとまたあの神父に食われたんだな」

はは、よくわかっているじゃないか。そうだよ。お前の料理にありついた時があるのは1回お前の家に行ったときに食べたカレーが最初で最後さ！

「それなら今夜、家に寄っていくか？ 今夜は中華に挑戦してみようと思ってるんだけどさ」

誘ってくれるのは非常にありがたいのだが。中華で思い出した。衛宮。

「ん？ なんだ？」

最近、お前の家にわが校のマドンナ遠坂さんが出入りしたのを見たのだが……それは僕の見間違いないよね？

「イヤー、オレニハナニカワカラナイナ」

凶星か……

「みんなに黙っておいてやるから、代わりに明日、今が旬の食材でうま

いものを期待してる」

親指を立て涙を流しながら衛宮に訴える。

苦笑いしながら「わかったよ」と衛宮が言いうと、一時間目の授業を知らせるチャイムが鳴る。

* * *

「タイガーム、いつもは反省文だけで終わらせるものをそれプラス今回は学校の雑用を上乘せるとは……」

廊下を歩きながら伸びをしながらぼやく僕に胸ポケットから顔を出し顔をぶるぶると左右に振りアヴェンジャーがいう。

「あなたもいい加減に自分で起きる努力をなさい」

さて、今日も一日長かったし素直に帰ります。

「……いつからあなたは私を無視できるほど偉くなったのかしら？」

冗談だよ。さて、今日の夕飯は愉悦神父が作るから毎度のこと泰山麻婆だろう……。

……考えただけで胃もたれしてきた。

あの人の作る麻婆はこの世のものじゃない。もはや兵器としても活用できそうなレベルだ。

今日の夕飯のことに思いやられ沈んだ状態で廊下を進んでいると真っ赤なものが目に映る。

視線を戻すとそこには我が校が誇るマドンナ。遠坂さんがいた。

「あら、あなた。今帰りかしら？」

「え？ ああ。まあ、そうだけど……」

人生で初めてこんな美少女に話しかけられた。

少し戸惑ったけど僕はなんとか返事を返す。

「そう。あなた、綺礼のところに住んでいるのよね？ それなら綺礼に渡しておいてくれるかしら？」

そういつて手渡されたのは何も書かれていない白紙。裏をひっくり返してみてもやっぱりただの白紙だ。

「わかったよ。ちゃんと渡しておくよ」

「ありがとう。それじゃ、私これから少し予定があるからそれ、よろしくね」

そういつて遠坂さんは去っていった。

……………。

「……………」

はっ！ 駄目だ。いくら彼女が美少女とはいえこんな――。

「……………」

あの、アヴェンジャーさん。なんですかその目は？ 僕、何かしました？

「……………ふん」

そういつて不貞腐れたように胸ポケットにうずくまるアヴェンジャー。

別に不貞腐れなくてもいいじゃないか。

胸ポケットを軽くなでる。

さあ、胃薬を買いに行こう。

* * *

近くの薬局で胃薬を購入し、僕の住んでいる家……と言っても居候の身だけでもこの町に唯一ある教会。言峰協会に到着した。

自転車を止め教会の重い扉を開ける。

「ただいま帰りました」

奥には信者たちが祈りを捧げる教会の祭壇の前に立っているのが僕の養父で愉悦神父と言っている言峰綺礼。

八極拳の担い手にして元聖堂協会代行者。数々の修羅場を潜り抜けてきた男にして僕を引き取ってくれた恩人だ。

「帰ったか。お前の帰りを待っていたぞ。さあ、夕飯にしよう。カレンは友達の家泊まると言っただけで、今日は帰らないらしいから、今日はお前と共に食事をとることになりそうだ」

……カレン。逃げたな。

僕の中でカレンが父親譲りの愉悦な笑みを浮かべる。

でも、変に突っかかったらマグダラの聖骸布で簀巻きにされるのがいつもの流れだ。

因みに僕の胸ポケットではアヴェエンジャーはガタガタ震えています。

この教会で夕飯は麻婆が出るたびに地獄と化す。

僕と一緒に食事をとっているのは王様ことギルさん。

僕はずっと痛い人だと解釈してるからその敬意を表して王様と呼んでる。

でも、その王様は毎日、ゲームとか愉悦とか言っただぐだぐだ過ごしている。

毎回思うけど、うらやましいなあ。

「あー、王様、何僕のところ自分の麻婆入れてるんですか!? 自分のぶんくらい自分で処理してくださいよ! 天上天下唯我独尊の英雄王とか言ってるくせに!」

「何を言うか雑種! これは王たる我が食すものではない! 仮にも私の臣下であろう! ならば私の代わりに残さず食せ!」

「嫌ですよ! こんな劇物、一人分食べるのに死ぬ思いしてるんですから! 王様この前自慢げに言っただけじゃないですか! 我はこの

世のすべての悪すら飲み干したことがあるって! この世全ての悪^{この世全ての悪}つてやつを飲み干せるなら泰山麻婆ぐらい楽勝でしょうに!」

「ええい! なにをたわけたことを言うか! この世全ての悪と^れ

泰山麻婆は違う！」

「ふっ……（愉悦的な笑み）」

僕と王様が自分の大皿に盛られた泰山麻婆を押し付けあう姿を見て愉悦神父は恍惚とした笑みを浮かべている。

愉悦って怖いね。

「そうだ。今回は少し作りすぎてな……お前の分もあるぞ。アヴェンジャー。いつもの食べっぷりを見せてくれると期待してるぞ」

そういつて大皿に盛られている泰山麻婆をアヴェンジャーの前に出す。

「ひいー」

小さな悲鳴と共にガタガタと震える小さなアヴェンジャーに出された大皿に盛られた泰山麻婆。

僕から見れば血の池地獄に突き落とされそうな罪人にしか見えない。

あとで彼女に胃薬あげよう。

それと、僕と王様の麻婆お付け合戦は最終的に王様が背後から武器をちらつかせたあたりで言峰神父の神麻婆の追加の救いで引き分けに終わった。

* * *

食事のあとは教会の隣に建てられた古びた道場で月明りを頼りに己の鍛錬。

僕は言峰神父に引き取られてから様々な世界を飛び回った。その際に教えられたのは八極拳。

八極拳には見せかけの技なんて一つもない。質実純朴でありおろかさである。

美を追求せず、ただただ実用性のみ特化した中華拳法。

八極拳において僕が尊敬する人物がいる。
名を李書文。

李氏八極拳の創始者にして「二の打ち要らず」の名で知られ、まさに武術を極めた者と言っても過言じゃない。

「ふっ！」

パン!

拳から発せられる乾いた音が夜の道場に響く。

八極拳をはじめ魅せられたからには目指すは武の頂点。

極めるはこの拳のみ。

「まったく……ほんとにあなた一体何を目指すつもりなのかしら？
いつそ教会の代行者にでもなれば？」

道場の窓辺に腰かけて僕の姿を見守るアヴェンジャーが言うのはたしかに一つの選択肢としてはある。

なんせ、10年前。本来ならば僕は死んでいるのだから。

10年前のあの大火災での生き残りだから……死んでいったみんなの為に、誰よりも強く在らないといけないんだ。

「……私も歪んでいるけれど、あなたも歪んでいる。ふっつ相も変わらずそれだけはぶれないのね」

口元に手を当て口の端を吊り上げるアヴェンジャー。

「そうだね。一度始めたことは終わるまで辞めないよ。それが、僕の心情だから」

「そう。なら、そのままくだらないモノ抱いたまま溺死すれば？」

「もうこんな時間か。明日も早いぞ」

伸びをしながら扉へ向かう。

明日はきつと早起きできるさー!

「ちよつと！ 待ちなさい！ お、降りられないじゃない！」

分かっているよ。僕は踵を返してアヴェンジャーを自分の頭の上に載せる。

え？ 胸ポケットじゃない理由？ まあ、たまには頭に載せるのもいいかなってさ。

「……………」

ほら、アヴェエンジャーも満更じやないでしょ？
そして僕たちは道場を後にする。

……あ、遠坂さんから渡された紙を神父に渡すの忘れてた。

まあ、明日でもいいか！

* * *

これから始まるのは喜劇かそれとも狂劇か。

カチリ……

静かに運命の歯車は狂いだす。

くるくると。

クルクルと。

狂る狂ると。

ACT02 狂いはじめ

ピピピピ!

目覚ましのアラームが私の耳に届く。

この小さい体にこのアラーム音はいささか大きすぎる。

だから自然と目が覚めてしまう。

私は目もこすりながらデジタル時計を確認すると時刻は6:30だ。

こいつは、いつもこの時間にセットしてるのに起きた試が一度もない。

なんでセットした本人が起きずに、私が起きないといけないのよ。

まったく……。

「うーん……あと5分……」

何をふざけた寝言を言ってるのかしら。

このスヤスヤと安心したこの寝顔。

なにか無性に腹が立つわね。

こんな寝顔を見ると安眠の邪魔したくなるじゃない。

私は壁に張り付き窓辺をめざしてそのまま剣を突き刺してクライ

ミングしていく。

ふう、ふう……さすがに窓辺までは遠いわね。

どれくらい上ったかしら？

真下を見ると、変わらずにスヤスヤと天井を見つめて寝ている。

まったく。私が起こさないと起きないこいつが悪いのになんで私が朝からクライミングしないといけないのかしら。

「……アヴェンジャー」

「え？ なに？」

条件反射で真下を見る。

その時、運悪く手を滑らせてしまう。

「あ」

私の体は自然の摂理によって落下していく。

結果……。

「ぎゃふんー」

あいつの眉間にお尻から着地……着肌かしら？

そのままお尻をさする。

あー、お尻がひりひりするわ。

「いたた……あれ？ アヴェンジャー？ 今日は僕の眉間になにを

……ずいぶん可愛いおしr——」

「うっさいー」

反射的に剣ではなく炎でこいつの目をつぶす。

「ぎゃあああああ！ 目が！ 目があああああ！」

ほんとに、こいつにはデリカシーというものがあるのかしら。

でも、目を覆い飛び上がる姿は素直に笑えたわ。

ACT02 狂いはじめ

まさか、朝から目を焼かれる羽目になるとは思ってもいなかった。

現在の時刻は朝の7:00。アヴェンジャーの今までにない刺激的な起殺こされれ方方方に自然と目が覚め体が覚醒する。

着替えを済ませアヴェンジャーを胸ポケットに入れてから、ダイニングへ向かう。とそこには神父が昨日の残りであろう泰山麻婆を食べていた。

よく朝からそんなものを食べられますね……この人の胃袋はどうかしているよ。

僕に気が付いたのか手に持っていたレンゲを一旦おく。

「おはよう。今日の朝は早いな。何かおかしなものでも食べたのか？」

おかし泰山麻婆いものなら昨日、たらふく食わされました。

「ふっ。そうか……。それはそうと昨日の麻婆が残っているからお前

も食べる——」

あ、そうだ！ 王様まだ起きてないですよね!?

僕が起こしてきます！

「待て、ギルガメツシユは——」

待てと言われて待ちますか！ 止まった瞬間に麻婆を朝から食べないといけない羽目になる。

それだけは何としても回避しなければ！

僕はダツシユでダイニングを立ち去り王様の部屋を向かう。

「やれやれ、今のギルガメツシユは賢者モードに入ってるから無理に起こさなくてもいいと言おうとしたのだが……まあ、それはそれで面白そうだ」

神父の声が聞こえたがどうせ僕の朝飯は麻婆みたいなことを言っただろう。

『ぎるがめつしゅ』というプレートが下がった部屋……王様の部屋の前に到着。

「王様—— 朝ですよ—— 朝飯ですよ—— 起きてくださいーい」

扉越しに扉を叩きながら王様を呼ぶ。

本当に起きてください。朝から麻婆と勘弁してください！

「別に朝から金ぴかを呼ばなくてもいいでしょう。麻婆くらい食べべきりなさいよ。仮にも男でしょ?」

アヴェンジャーが胸ポケットから顔を出して言うが、君もそんなことを言える立場じゃないだろう?」

そうしたらまた、あの泰山^{血の池地獄}麻婆を見る羽目になるんだよ?」

「……………(ガタガタガタ)」

嫌なことを思い出したといわんばかりに、胸ポケットの中に入りガタガタと震えはじめる。

『…………朝からうるさいぞ、雑種。我は今とてつもなく無気力なのだ……。ああ、セイバーをもう一度この手で……くう!』

やっと返事が返ってきたと思ったら、何をわけのわからないことを言ってるんですか!

こっちは朝から命かけてるんですから！

『セイバー……あの麗しく華奢なあの肢体……今一度、我の手で――』

ダメだ。朝から変なモードに入っている。

こうなれば実力行使だ。

「王様、ご無礼を失礼します！」

扉を強引に開け部屋を確認する。

「二」

僕とアヴェンジャーの目が点になった。

僕たちの目に映ったのは、アヴェンジャーと似たような顔の人物の写真が部屋中に散乱しており、部屋の中心で悟りを開いた御仏のように座禅を組んで顔を伏せている王様の姿があった。

しかも全裸で。大事なことからもう一度言う。しかも、全裸で。

昨夜、一体何があった……。

僕たちがこの光景に啞然としてみると王様が僕たちの存在に気付いたのか「はっ！」と言いブリキのように顔を上げる。

「見たな？」

さつきまで死んでいた王様の目に光が戻る。

「な、なんのことでしよう……」

思わず身を引く。

「見たな？」

瞬間的に開かれた黄金の波紋が部屋中に散乱していた写真を回収する。

「ですから、なに――」

一歩後ずさる。

「見たな――！」

再び開かれた黄金の波紋から10や20ではきかない数の剣や槍が一斉に射出される。

「す、すいませんでしたあああああああああ！」

僕に平和な朝というのは、いつ訪れるのだろうか？

* * *

朝からあのような騒動があるとは……。

結局。僕は朝からあの麻婆を食べる羽目になり体から汗が吹き出し、口から火をはき（比喻にあらず）おなかの中でがずんがずんが麻婆が暴れている。

そして、自転車に乗るほどの元気があるわけでもなく歩いて学校へ向かうことにした。

時刻にして朝8:30。このままいけば普通に間に合うが、いかんせん僕のお腹で暴れている麻婆は衰えるどころかむしろ活性化している。

神父エ……あの麻婆に何を入れた。

え？ アヴェンジャーはどうしたかって？

アヴェンジャーはね、いつもは胸ポケットに入ってるのに今日に限っては頭にのっけているんだよ。

しかも、理由を聞いても答えてくれない。

……ねえアヴェンジャー。

「何よ。私は忙しいのよ」

やっと返事が返ってきたって！

なんで僕の髪をチマチマと抜いてるの!?

いじめ!?! これは新しい僕へのいじめか!?!

「あんた、白髪が多いわよ。髪質はいいんだから手入れぐらいはしっかりなさい」

あ、はい。

結局。学校に着くまで僕はただひたすらアヴェンジャーに白髪を抜かれ続けた。

* * *

いつもは遅刻ギリギリに来てるから廊下は常に走るものだと考えていたけれど、今はHRまで時間はまだあるからゆっくり教室へ向かう。

あー、なんだかとても新鮮だ。

いつもは誰もいない廊下を走っているのに、今は生徒たちが談笑したりしてるよ。

廊下ってこんなにも賑やかなモノなんだね。

因みにアヴェンジャーはちゃんと僕の胸ポケットにいるよ。

流石に学校で僕の頭に堂々と乗せるわけにはいけないからね。

……さて。僕の教室に着いたわけだが、みんなどうしたの。

そんな信じられない！ みたいな顔をして。

「「ぐだおが遅刻してないだど!?!」」

「悪い?。」

首を傾げて聞いてみる。

それと、僕の名前は……まあ、いつか語ることにしてあだ名^{ニっ名}はぐだお。

何故かって？ それは。まあ……自分で言うのもあれだけど、ぐだおだしてるからだよ。

「「今日は何か起こるぞ!」」

そこまで言うか。

『あの遅刻常習犯が……こんな時間に?』

『いつものタイガーとの第47回遅刻の擦り付け合い合戦はないの!?!』

『今日はきつと何かが起こるぞ……』

なんでぞ。

僕は自分の席に着き隣で鞆から荷物を出している衛宮に話しかける。

「えーみーやー」

「ん？ どうしたんだ、ぐだお……朝から大変だったんだな」

どうやら僕の目だけで今日の朝のことを察したらしい。

無駄な観察眼だな。うん。

すると衛宮は強引に話題を変える。

「そ、そうだ。今日は今が旬の白魚をたくさんもらってさ、その中華風にアレンジしたものがあるんだ——」

「中華はもうたくさんです」

昨夜の泰山麻婆。

今朝はその残りの泰山麻婆。

あげくに中華風にアレンジしただと？

「え？ でも昨日は旬の食材でうまいものがいって……」

「それでもしばらく中華は勘弁してください」

「そこまで言うならわかったよ。それなら明日はロールキャベツでいいか？ 昨日、商店街で買い物してたらキャベツが安売りしててさ、

昨日の夕飯にもキャベツを使ったんだけど少し残ってるからそれでいいか？」

「中華以外なら喜んで」

「あはは……」

衛宮の苦笑いが痛い。

それと、僕の胃袋にいる麻婆はまだ元気です。

* * *

今日はなぜか非常にツイていない。

ツイてないのはいつものことだが今日は非常にツイてない。

普通に廊下を歩いていると誰かと肩がぶつかり、その肩がぶつかった人間というよりも海藻類に近い奴はわーわーと喚いた拳句よくわからないことを言ったあとに「おぼえてろよ！」とか言つてどこかに行つた。

……今日の夜ごはんの味噌汁は具はワカメと豆腐かな。

僕が密かに使用してる秘密の場所こと学校の屋上で購買で買ったパンを食べていると、いきなりタイガーが表れた。

そのあと？ 決まってるじゃないか。散々言い争つて痛み分けと
いうことにしたの。

移動授業の際に階段を衛宮と談笑しながら登っていると遠坂さんと遭遇して僕に渡した紙を渡してくれたか？ って聞かれたから、渡してない。って答えるとね。

ギリツ！ って歯を鳴らしたんだよ？

あの才色兼備のミス穂群原がだよ？

きつと麻婆のせいだと信じたいよ。

……今日の1日も長かった。

気が付けば辺りはオレンジ色に染まり、ほかの生徒たちは帰つていく。

なんだか濃い1日だったよ。

いろんな意味で。

「ふん。あんたの幸運ランク。きつと一番低いEね」

いつの間にか僕の胸ポケットから顔を出したアヴェンジャーが邪悪な笑みを浮かべ僕に言う。

うん。それに関しては間違いないね。

あ、そうだ。じゃあ、アヴェンジャーの幸運ランクはどれくらいなの？

「

今、墓穴掘つたって顔してるよ。

しばらくフリーズした後そっぽを向きながら

「き、決まってるじゃない。Aよ。A！ あなたの最低ランクのEとは違うんだから」

そうかーAなのかー。

「そうよー。最高の幸運の持ち主よ」

幸運かー。でもその幸運の持ち主といえるのに僕にはちつともいいことがないなー。

朝から眉間にヒップドロップを食らうし、目を焼かれるし。

大変だったなー。

「うっ……」

今日の朝のことを掘り返すと急に顔を真っ赤にして僕の胸ポケットに隠れた。

「はあー……今日も長かったなあー」

深くため息をつき玄関で靴を変え、グラウンドに差し掛かった時だ。

世界が炎に包まれた。

* * *

カチコチカチコチ……

運命の歯車は止まらない。

ACT03 葛藤と覚悟

理解できなかった。

今、ここで起きたことが。

一瞬空がピカッ！ って光ったと思ったら僕は爆風に揉まれてグラウンドで何度も転がる。

頭を打ったのか僕はしばらく気絶していたようだ。

そして、改めて目を覚まし辺りを見回す。

この光景は一度見た。

何度も夢に見た悪夢。

辺り一面を埋め尽くす炎。

充満するは死の臭い。

僕は思わず四つん這いになり手を口に当てこみあげてくる吐瀉物をこらえる。

なんなんだよ……なんで。

なんでまた……。

僕は……僕は……ぼくは……また……。

「落ち着きなさい。そして周りを否定しなさい」

胸ポケットから聞こえた凜とした声。

僕の相棒たるアヴェンジャーからだった。

「で、でも……」

「口答えしない。次に弱音を吐いてみなさい。弱音をはけなくさせるわよ?」

珍しくアヴェンジャーから言われたのは彼女なりの励ましの言葉だった。

……そうだね。

僕は吐き気を堪えながらゆっくりと立ち上がる。

「そうよ。あんたは弱音なんて吐かずに、前を見てればいいのよ」
アヴェンジャー。

「何よ。なにかやるの? 人命救助なら止めておいたほうがいいわよ。見てのとおりあんたの学び舎は見事に崩壊。あたりには火の手

が上がっている。これで生きてるほうがおかしいわよ」
でもね、アヴェンジャー。

10年前の僕もこんな状況から助けを待っていたんだよ。
誰か助けてくれるって信じてさ。

「って本気で言ってるの? ……ふん、勝手にしなさい」
ありがとう。

僕は崩壊した学校へ向かって走り出した。

ACT03 葛藤と覚悟

「誰かー! 誰かいないのか?! いるなら返事をしてくれ!」

瓦礫をどかし、どかしきれないものは少し乱暴だが鍛え上げた拳で
破壊する。

「くそっ!」

どかしても壊しても出てくるのは瓦礫ばかり。

「だれか! ……誰か! 出てきてくれ! 生きててくれッ……!」
絞り出すように声を荒げ瓦礫をひたすらどかしていく。

どれだけの時間がたっただろうか。

結局、この崩壊した学校から出てきたのはたくさんの瓦礫と数名の
生徒たちの亡骸だった。

全員を知っているわけでもないが、顔見知りの人もいた。
「……………」

僕はその場に力なく座り込む。

結局、誰一人。僕は助けることができなかつたよ。
ねえ。アヴェンジャー。

「……なによ。私は死者を弔うなんてそんなことはしないわよ」
「そうだね。なら、せめて埋葬してあげよう。」

「勝手になさい。私は手伝わないわよ」

「そういつて胸ポケットから飛び出すアヴェンジャー。」

「僕の邪魔をしないためかな？」

「……よし。やろうか。」

僕は立ち上がり穴瓦礫の中から使えそうな木の棒で穴を掘り始める。

すると、僕の隣でアヴェンジャーが自分の剣で穴を掘り始めた。

「アヴェンジャー……」

「か、勘違いしないで！ わ、私はあんたが大変そうだから手伝ってるんじゃないから！ き、気が向いただけよ！」

するとアヴェンジャーは顔を真っ赤にしてそっぽを向きながら穴を掘り続ける。

思わず笑みが顔から漏れる。

「相変わらず素直じゃないな。」

「こんな時でも、アヴェンジャーはアヴェンジャーだな。」

「……ありがとう。アヴェンジャー」

素直にお礼の気持ちを伝えると顔を更に真っ赤にして物凄い速さで穴を掘る。

「もう君が入るほどの穴になってるじゃないか……」

アヴェンジャーも手伝ってくれたこともあり、僕が見つけることができた人たちを亡骸を全員埋葬する。

僕は両手を合わせる。

それをしり目にアヴェンジャーは身体に着いた泥や汚れを落としている。

「そしてある程度、綺麗になったのを確認した後に僕は彼女を胸ポケットに入れる。」

「で、これからどうするわけ？」

「胸ポケットに入らないり次のことを聞くアヴェンジャー。」

「とりあえず、一旦、教会へ戻るよ。神父のことも気になるしね」

「賢明ね」

短い会話を終え教会へと向かう。

* * *

ずお……。

そしてこの世をさまよう亡者は動き出す。

この世に対する強い未練を持つて。

* * *

僕は走って教会へ向かう。

その間にも生存者がいる可能性を信じて叫びながら。

しかし、一向に生存者は見つからない。

「……あんたが思いつめる必要なんてないわよ。人間はいつか死ぬのよ？ そんないちいち考えてたらあんたこの先、潰れるわよ？」

別に潰れたっていいさ。

僕は、今の僕からすれば生きてること自体が地獄だよ。

「！」

僕とアヴェンジャーが後ろから感じたのは殺気。

反射的に右へ地面をけり相手と相対する。

「なんでだよ……」

思わず口から零れたのは素直な言葉だった。

「相手は手に武器を持った骸骨。

それだけならば僕は「なんでだよ」なんて言葉は出ない。
なぜなら……。」

「ちっ。ずいぶんと忌々しいわね。懇切丁寧に埋めてあげた、こうして蘇られちゃいけないじゃない」

僕の言葉を代弁するように吐き捨てるアヴェンジャー。

そういえる決定的な証拠があった。
だって。

「なんでお前らが穂群原ちの制服を着てるんだよ！」

しかもその制服は泥に汚れている。

最早疑いようなない事実だった。

「ぐだお」

アヴェンジャーから珍しく名前あだ名を呼ばれる。

胸ポケットから顔を出し真剣な表情で伝える。

「こんなことを言いたくはないのだけど、この際甘さを捨てなさい。
非情になりなさい。そうしないとあなたの心情は嘘になるわよ？」

「ツツ！」

そんなこと言われても……！！

「僕は……！ 人を殺したくない！」

僕は無様にも相手に背を向け走り出す。

それと同時に骸骨たちも僕たちめがけ走り出す。

「なっ!? あなた、どういうことをしてるのかわかっているの!? 始めたことは終わるまで辞めないんでしょう!? 死者を弔うということを始めたら最後までやりなさいよ！」

それでも……！！

僕は……人を殺したくない！ ましてや、同じ学校にいた人たちを殺すなんて……！！

「僕にはできない！」

「あなたねえ……！！」

苛立ちの表情を見せるアヴェンジャー。

「誰も殺さないなんて甘ったれたこと言ってるんじゃないわよ！ 相

手はもう人じゃないのよ!? 何をためらう必要があるの!」
「でも……」

「ああー… もうあなたなんて知らないわ! そんなことを言ってるよ
うなら、その理想を抱いて溺死なさい!」

素晴らしい捨てるアヴェンジャーは僕の胸ポケットから飛び出し
骸骨たちと対峙する。

無茶苦茶だ! その小さな体で何ができるんだ!

僕は急ブレーキをかけ立ち止まる。

「小さいとはいえ私はサーヴァントよ? 情けないあなたぐらい守れ
るわよ!」

腰から剣を抜刀。

骸骨たちに突貫していく。

ダメだ……。

ここで彼女をいかせたら僕はきつと後悔する。

でも。人は殺したくない……。

僕はどうすればいいんだ……!

「アヴェンジャー!」

どうすれば……!」

* * *

あいつの情けない姿。
本当に見てられないわ。

それにしても景気よく飛び降りたけれど、どうしようかしら。

私の本来の宝具である旗はあいつがポンコツなせいで使えないし。
ステータスも本来の半分以下だ。

おまけにこの体格でどうやって勝とうかしら。

私は剣を腰から勢いよく抜き、骸骨に向かって突貫する。

一番前にいた骸骨が勢いよく振り下ろした剣をサイドステップで

躲し、剣の刃の上に乗れり頭蓋めがけ駆け上がる。

剣から腕へ腕から頭蓋へ駆け上がる。私は勢いよく剣を頭蓋骨へ突き刺し中から炎で爆散させる。

「喰らえー！」

ボンッ！

文字通り四散した骸骨を見て気を抜いた私がまずかった。

「っっー！」

爆炎から出てきたのは次の骸骨。

槍を突き出し私を貫かんと迫る。

体中にすぐさまガードするように命令を出す。が間に合わなかった。

「くっー！」

骸骨の繰り出した槍は私をかすめるように通り過ぎたがそのせいで私は後ろへ転がる羽目になった。

私はすぐさま起き上がり、ぶるぶると顔を振り前を見ると骸骨が私を捕まえようと手を出してきた。

後ろへ後退しようとするがさっきの攻撃で頭を打ったのか視界がぼけている。

案の定、私は骸骨の手につかまる。

「かはっー！」

加減つてものを知らないの!?! こいつは!

私を握りつぶさんと更に骨に力を籠めはじめ。

ああ。柄にもなく何やったのかしら。私は……。

ぼやけている視界で最後に見たのは私を握りつぶそうとしていた骸骨を自慢の拳で殴り飛ばすあいつの姿だくたおった。

* * *

僕は彼女を握りつぶそうとしていた骸骨の腕手刀で断つ。そしてアヴェンジャーを手から解放させた後、流れるように胸ポケットに入れ、最後に右の拳で頭蓋を殴り潰す。

僕はとんでもないバカだ。

相棒の彼女が戦っていたのに僕は茫然としていた。

彼女が僕の為に戦っている。

それなのに、相棒の僕が戦いわないのはおかしい。

「ごめん。アヴェンジャー……情けない姿を見せたね……」

返事はない。

さつき確認したけど、息はあつた。

少なからず死んではない。

「ごめん。みんな……」

謝罪の言葉を骸骨たちへ言う。

そして言い終えると同時に前を踏み出す。

目の前にいた剣を手にとっている骸骨が剣を横風する。

僕は骸骨が横風するより速く相手へと肉薄し力強く足を踏み込む。

そして肘を頭蓋へと打ち出す。

「……発勁」

震脚で貯めた爆発力を自分の体から相手の体へ衝撃を与える技だ。

震脚を基本動作とした八極拳の基本技にして僕の最も得意な技。

発勁をまともに受けた骸骨は吹き飛ばされ周りの骸骨たちを巻き込みながら力なく倒れる。

「みんなごめん……僕は。まだ死ねない。だから——」

必要最低限の攻撃で君たちを葬ろう。

* * *

気が付くと、私は見慣れたところにいた。

「……あいつの胸ポケット」

いつも自分が陣取る慣れ親しんだ場所にいる。

夢ではない。

私はいつも通り胸ポケットから顔を出す。

そして斜め上を見上げると、あいつが泣いていた。

「くっ……うっっ……」

袖を濡らしながら泣いている。

……こいつの泣き顔。

本当に笑えるわね。

無様な面で鼻水たらしながら泣いて。

でも、今回の改めて分かった。

あいつは……生に関する意識が歪んでいる。

自分を殺してさっきの骸骨たちを倒した。それでもあいつは、初めて人を殺したというだろう。

あのような異形を人として認識している。

そして今。罪の意識から苦しんでいる。

罪に感じる必要性はないにも関わらずに。

……ぐだお。

「ぐすっ……？ どうした、アヴェンジャー？」

……さっきはあ、ありがとう。助かったわ。

「……どういたしました」

涙をぬぐい無理やり笑顔を作るぐだお。

……バカ。

こういう時は、私に頼ってため込んだもの吐き出さないよ。
本当に、バカ。

* * *

そして少年は葛藤し覚悟を決める。

この覚悟が運命の歯車を加速させる。

ACT04 聖杯戦争

僕とアヴェンジャーは駆け足で教会へ向かう。

教会へ向かう道中も何度か骸骨と遭遇した。

その度に自分の拳で葬ってきた。

教会のことも気になるし、神父のことも気になる。それに王様も

……たぶん大丈夫。

言峰神父は殺しても死にそうにない人だ。あの人のことだ。僕が慌てて戻ってきたところを笑うにきまっている。

王様も王様で殺しても死にそうにない類の人だ。なにせ世界最古の王様ギルガメッシュ（笑）なのだから。

次の角を曲がれば教会だ。

この炎が回っている中で教会は原型を保っている。

僕は教会の扉を蹴破り中へと入る。

「！」

そこで僕が目にしたのは礼拝堂で体から血を流し倒れている言峰神父の姿だった。

「神父！」

僕は神父の下へ駆け寄り胸に耳を当て心臓が動いているか確かめる。

……微弱ではあるが生きてる！

僕はすぐさま自分の鞆に常備しているタオルで神父の傷口に巻いて止血する。

「神父！ 僕です！ ……ぐだおです！ 神父！」

「ぐっふっ！ ……ふっ、誰かと思えばお前か」

血を吐き、うつすらと目を開く。

「何があっただんですか!? それに王様はどこです!?!」

「……情けないが私たちは負けたのだ。ギルガメッシュは座へ強制返還された……私はあいつを甘く見すぎていた。——ぐっふっ！」

「喋らないでください！ 傷口が開きます！」

さつきまいたばかりなのに、もう血でタオルが真っ赤になってい

る。

「新しいタオルと救急箱を持ってきます！ 死なないでくださいよ！」

僕は新しいタオルと役に立つかもわからないけれど救急箱を取りに行こうと立ち上がる。

「待て。ぐだお」

立ち上がった僕の腕をとり声をかける神父。

「なんですか」

僕は神父に向き直る。

「残念ながら、私はもう持たん。いくら泥が心臓の代役を果たそうともその元を壊されれば元も子もない……」

「一つ聞こう——生き残りたいか？」

神父は一拍置いて静かに開け問いかける。

「もちろんです」

即答だった。僕はそう簡単に死ねないし、死にたくない。

「そうか……ならば、誠に遺憾だがお前にくれてやろう」

素晴らしい終わると神父は腕をまくり上げる。

そのまくり上げられた腕には赤い痣のようなものはいくつもあ

ると、痣が淡い光を帯び始め次第に痣が消えてゆく。

「ツツ！」

右腕に鋭い痛みが走る。

思わず右腕を抑える。

そして症状を見るために腕をまくり上げるとそこには手から肘にかけて神父と同じような痣があった。

「これは……」

「なに、ただの餞別だ。お前のこれからの道化つぷりをこれからも地獄から見守るとするか……」

素晴らしい終わると神父は糸が切れたように息絶えた。

「なんで勝手に死ぬんですか……」

僕の頬に再びぬるい涙が伝うのだった。

僕は神父の亡骸を抱え教会を出る。

そして、神父があのような亡者にならぬように火葬を行った。
人が焼ける。

タンパク質が燃えた時に発する独特のにおいが鼻を突き抜ける。
形見となつてしまったこの幾重にもあがかれている刺青のような
赤い痣。

「……アヴェエンジャー。これからどうする？ 僕、また帰る家を無く
しちやったよ」

「……そうね」

アヴェエンジャーと共に神父が燃えるさまを見ている。

ああ。人が死んでいる。

僕は一体何なのだろうか？

■■■■は既に死んでいる。

それなら、僕は一体……。

くらい空を見上げる。

空には巨大な円環が浮かんでいる。

改めて思う。

僕の心には穴が開いている。と。

不意に、背後から気配を感じる。

だが、今までの殺気とは違う。

骸骨のような気配でもない。

これは、人間の気配……。

だが、これがもし。言峰神父と王様をやったやつだとすれば……僕
で勝てるのか？

僕は気づいていることを悟られぬように再び炎に向き直る。

そして、背後から気配が僕の技が放てる有効射程内に侵入すると

もに、先手必勝とばかりにわずかな動作で震脚を行い背後の奴に攻撃を繰り出そうと、僕は拳を突き出す。

が、その拳は相手の顔面間近で止める。

「……衛宮?」

「……ぐだお?」

僕が拳を繰り出した相手は、赤銅色の髪をしている友達の衛宮だった。

「衛宮、お前「ぐだお、お前生きてたのか!」勝手に殺すなよ」

僕が死んでいるとは失礼な。

遅れてやってきたのは穂群原のマドンナ遠坂さんだった。

「ちよつとー。待ちなさいよ。士郎ー。ってあなた……誰だっけ?」

まさか、名前すら覚えてもらってないとは……。

「ああ。こいつの名前は——」

「ぐだおって呼んでくれるといいよ。みんなそう呼んでるから」

衛宮の言葉を遮るように僕が遠坂さんに言う。

「……そう。ならぐだおくん。綺礼はどこにいるか知ってるかしら?」

「そうか……彼女たちはまだ神父のことを知らないのか。」

「言峰神父はさつき、僕が火葬を行ったよ……」

僕は神父を火葬した炎を目で見ながら言う。

「……あのエセ神父がそう簡単にくたばるとは思えないけれど、あなたの言葉を信じるわ。それと、あなたの腕にあるのは。何かしら?」

遠坂さんと衛宮の視線が僕の右手に注がれる。

「神父からの餞別だよ。これからも僕の道化つぷりを地獄で見てるつてさ」

「そういつて僕は右腕をまくり上げ、遠坂さんに見せる。」

「綺礼があなたに預託令呪を託した……? それなら、あなたは『魔術師』ということになるけれど、それで合ってるかしら?」

「正確には家系が、だけどね」

肩をすくめる。

「立ち話もなんだし、教会へ入る? 道場の方は倒壊しているけれど、

礼拝堂の方はまだ無事だから」

「そうするわ。いくわよ、士郎」

今まで空気がだった衛宮に言う遠坂さん。

そして、僕たちは教会へ入っていく。

* * *

「じゃあ、改めて自己紹介させてもらおうわね。遠坂凛よ。この冬木のセカンドオーナーでもあるわ。よろしくね、ぐだおくん」

「よろしく」

遠坂さんが手を差し出してきたので僕も手を差し出し握手を交わす。

……随分と華奢な腕だ。

それで思い出した。

「そういえば遠坂さんはうちの道場の門下生だったね」

「え？ なんの門下生ですって？」

あ、シラを切られた。

「なについて、八極拳に決まってるじゃないか。うちの道場の一番弟子みたいな感じで札が下がっていたよ？」

「……#（あんのエセ神父ううううううううううう！）」

今、彼女の額に青筋が浮かんでいるのは気のせいだろう。うん。

僕たち改めては教会の礼拝堂の硬い椅子に座る。

「改めて、あなたに聞きたいことがあるわ。あなた魔術師の家系なのよね？」

最初に切り出してきたのは遠坂さんだ。

「そうだよ。でも、神父から聞いたことだから、どうせ冗談か何かだろうって思ってたさ」

「あんのエセ神父うううううううう！ 冬木のセカンドオーナー私の報告も一切なしですって!?! ふざけるのも大概にしろっての!」

ムキー！ と言って衛宮に向かってローリングぽこぽこかましてる。

……ああ。これが素の遠坂さんか。

あれー？ 誰かに似てる気がする。

「はっ！ おっほん。と、とりあえず、あなたが魔術師の家系であることは分かったわ」

咳払いして話題を戻しても時、すでに遅しだよ。

「それなら、次は僕の質問に答えてもらってもいい？ 質問攻めは流石にね」

「……わかったわ。私たちの答えられる範囲内なら答えるわ」

「まず、この冬木で何が起こっているんだ？ 似たようなことが10年前にもあった。それと何か関係があるの？」

素直に聞きたかった質問。

そのセカンドオーナーというほどだ。何か知っていてもおかしくない。

「あなた、10年前の冬木でこの災害を……」

「それはどうでもいいことだ。それよりも、この冬木はどうなっているんだ？ いきなり光ったと思えば爆風で飛ばされるし、学校倒壊してるし、埋葬した死者が骸骨になって襲ってくるし……本当にどうなってるの?」

「あー……そんなに一度に言われても難しいから、順を追って説明するわ。まずは『聖杯戦争』について説明する必要があるわね。まず、聖杯戦争っていうのはね——」

あらゆる願いを叶えるという万能の願望器、聖杯……。

聖杯に選ばれし七人の魔術師は、過去、未来における伝説を打ち立てた者たち英雄の魂……英霊をサーヴァントとして従え、マスターとして聖杯を手に入れ願いを叶えるという権利を巡り、血で血を洗う闘争のこと。

魔術師たちはその戦いを、『聖杯戦争』と呼ぶ。

……少し頭が痛くなってきた。

こんなことが冬木で起こっていたのか。

「ええ。私と士郎はその聖杯戦争のマスターとして聖杯戦争に参加していたわ」

「……なんでそこ過去形？」

「言いたくはないけれど、私たちのサーヴァントが奪われたのよ」

奪われた？　サーヴァントって簡単に奪われるものなの？

「違うわよ。そう簡単に奪われるものじゃないわ。なにか特別な魔術、それも神代の魔術レベルじゃないと無理よ」

「ふーん……。それで、この惨状となにか関係あるの？」

「少しは察しなさいよ。これは聖杯戦争で起きた二次災害よ。あなたの言っていた光ったというのは円蔵山にある聖杯に膨大な魔力を無理矢理流し込んで暴走させて起こった爆発よ。そして、聖杯は破壊された余波がこの惨状が生まれたわけ。水風船に限界まで貯めた状態からさらに水を加えれば破裂するのと同じよ。聖杯が破壊されたせいで、私たちは聖杯の魔力のバックアップなしで英霊をこの場に繋ぎ止めることはできない。そこを狙われたのよ。」

なんとなく事の顛末が読めてきたよ。

それならば、10年前の災害はその聖杯に膨大な魔力を流し込んだから起こった？

それがそうとしたら、聖杯は既にない状態になる。

ということは10年前の災害はまた別になる……？

「ちよつと。いつまで私を空気にさせるつもりよ」

不意に胸ポケットからひよっこりと顔を出したアヴェンジャー。

え？　このシリアス場面に君を出すわけにはいかないだろう？

「ちよつと！　それはどういう意味よ！」

その言葉のとおりだけど、なにか？

「ムキー！」

僕に向かってローリングぽこぽこをかますアヴェンジャー。

あ、デジャブ……ちよつと！ お願いだから胸ポケットで暴れないで！

「……士郎。私少し疲れてるみたい」

「空気だった俺に助け船をありがとう」

遠坂さんが頭を抱えその隣にいた衛宮が肩を叩いて「大丈夫」って言っている。

夫婦か。お前らは。

「あんたねえ……。あ、ぐだおくんのほうよ。なんで聖杯のバックアップなしで英霊を限界させているわけ？」

「嫌だなあ、遠坂さん。僕がそんなのわかるわけないじゃないか」

H A H A H A！ と笑いながら言う。

「もしかして、ポケットサイズだから消費する魔力も半分以下になるのかしらか……？」

顎に手を当てて考え始める遠坂さん。

「それは、置いといて。ぐだおくんの手サヴァントの真名はなに？」

「え？ 真名？ ああ、知らないよ」

「ふーん、知らないんだ……（威圧）」

淑女が鳴らしてはいけないボキボキという音を立てる遠坂さん。

「え？ 真名って知る必要あるの？」

「あるわよ！ それによって色んな作戦が練れないでしょうが！ それなら、はクラス名？ アサシン？ それとも、キャスター？」

「いや。アヴェンジャーだけど」

「…………士郎。私もうだめみたい。普通の聖杯戦争にアヴェンジャーなんて本来は召喚されない筈なのに……」

遠坂さんが疲れきった目でこちらを見てくる。

やめてくれ。なんか悲しくなる。

「こいつ、そんなに凄かったの？」

改めてアヴェンジャーを見る。

「……(ドヤア)」

うわあ、今世紀最強のどや顔をかましてくる。

こんなのが輝かしい功績を打ち立てたのか？

「遠坂さん。それはないよー。だって彼女はとんでもないほど我儘で
兔レベルの寂しがり屋で——あべし!?!」

あの、アヴェンジャーさん。

胸ポケットから大ジャンプからのライダーキックなんていつの間
に覚えたんですかね？

「あんたはいつも一言多いのよー!」

見事に椅子に着地したアヴェンジャーが僕に指をさして訴える。

あーはいはい。分かったからおとなしくしていようねー。

そういつて指でつまむ。

その間にもギャーギャー喚いていたけどそんなのお構いなしで胸
ポケットにダイブさせた。

「とまあ、こんな彼女が英霊だと?」

最高の決め顔で衛宮と遠坂さんに言う。

「士郎。胃薬なんて縁起のいいもの持っているかしら? 物凄く胃が
きりきりしてきたの」

「大丈夫だ遠坂。俺もあいつを見てると俺って実はまだマシな部類
だったんだって思ったよ」

あれー? 反応がおかしいな。もう少し食って掛かると思ったん
だが。

「ぐだお」

「どうした。衛宮」

さっつきまで空気だった君が。

「なあぐだお。今物凄く失礼なこと考えていなかったか?」

「気のせいです」

「……まあ、いいけれど。お前、10年前の災害を受けたのか?」
ピタ。

自分の顔が無表情になるのがわかった。

「それを聞いてどうするんだ? 衛宮。同情でもするの?」

「いや……それは」

目を逸らす衛宮。

「それなら、聞かないでくれ。僕もあまり思い出したくない」
本当に。思い出したくないんだ。

「ぐだおくん。士郎もあなたと境遇を同じにした10年前の災害に
あつた一人よ」

「ちよ、遠坂……」

……衛宮？

あの災害の生き残り？

「……なあ、衛宮」

重い口を開く。

「お前、自分が歪んでいるって思うときはあるか？」

「……歪んでいないと言ったら嘘になる。俺は『正義の味方』になるこ
とが目標だ。それは他者を助けるということだけだ。基本的に自分
は助かっていない。でも、誰かを助けたいって思う気持ちは間違い
じゃないと思うんだ」

拳を握り力説する衛宮。

「なんだ……お前はもう『答え』を得ているのか」

二人に築かれないように小さくつぶやく。

衛宮はすでに自分の『歪み』に対する答えを得ている。

でも、俺は……！

僕は椅子から立ち上がり叫ぶ。

「二人とも！ 今すぐに教会から出るんだ！」

「何を言ってるの？ あ——」

「つべこべ言わずに早く出るんだ！ 死にたいのか！」

僕の気迫に押されたのか遠坂さんと衛宮は急いで教会から出る。

「……壊れた幻想」

ドガアアアン！

爆炎が教会を破壊した。

*
*
*

本物と偽物、両者が交わるとき
運命は動き出す

A C T 05 弓兵

僕たちはさつきまでいた教会を壊したやつと対峙している。

「ふむ……。さっきの攻撃で仕留めたかと思えば、まだしぶとく生きているか」

そいつは一言で言い表すなら、影。

人の形をした影だ。

だが、その影から発せられる殺気は紛れもない本物だ。

まさか。こいつが……。

「アーチャー。私に向かってどういうことを言ってるのよ」

その言葉を発したのは遠坂さんだ。

「凜。悪いが私はもう君のサーヴァントではない。君が私のマスターでなくなった以上、私を縛った令呪の効果も意味をなさない」

「くっ」

その言葉に歯噛みする遠坂さん。

この一連の会話から察するに遠坂さんとあいつはマスターとサーヴァントの関係だったんだろう。

「ほお。そこの君は随分と珍しいものを持っているじゃないか」

アーチャーと呼ばれたサーヴァントが僕に……正確には胸ポケットに視線が突き刺さる。

咄嗟に胸ポケットを抑え半身になる。

衛宮を一瞥した後僕を見ていう。

「ふっ。どうやら、そこに突っ立っている衛宮士郎よりもできそうだな」
「そうれはどうも」

苦笑いを浮かべながらそう返すしかなかった。

「さて、私もやらねばならないことが山積みなのでね。手短にするとしよう」

言い終わると同時に全身を走る悪寒。

「悪いが、三人はここで朽ち果ててもらおうか」

弓兵の双剣がその牙をむいた。

言い終えると同時に飛びだしたアーチャー。

それに反応し衛宮が同じ双剣を生み出しつばぜり合う。

「私の投影を模倣したか。だが、イメージ通りの外見、材質を保とうが構造に理がなければ私を倒すことなどできない！」

アーチャーが力押しで切り結んでいた衛宮を払う。

それと同時に衛宮の剣が破壊され後ろに後退する。

その隙に気配を感じさせずに背後に立ち回り背後から一撃で葬る

ための発勁を――

「私が、衛宮士郎だけに気を取られていると思っただか？」

放つ前にアーチャーの回し蹴りが腹部に突き刺さる。

回し蹴りを受けた僕は4m近く吹き飛ばされる。

くそっ……なんてやつだ。

後ろに目でもついているのか？

痛む腹部を抑え立ち上がる。

まともに喰らってもいい代物じゃないぞ。

でも、ここで伸びていたら死ぬ。

「衛宮！ 同時にかかるぞー！」

叫びながらアーチャーめがけて走る。

2対1で卑怯なんて言うなよ！ そうでもしないと勝てるかすら

わからないんだからな！

遠坂さんも指先から黒い弾丸みたいのを打ち出しているがそれも

アーチャーに弾かれるか受け流される。

その援護もあり僕は右脚を強く踏み込みアーチャーの懐に迫る。

アーチャーは懐に攻め込まれる前に右手に持っていた白の剣を横

風に一閃し僕の足を止めさせる。

その間に衛宮が再び白と黒の双剣で切りかかるも数回打ち合ったのちにアーチャーに破壊される。

くそ！ 攻めきれない！

元々、八極拳とは極めて近距離で戦うことを旨に置かれた武術だ。

その様相は『陸の船』動かないものと形容されるほどに射程が短く、自分の腕の届く範囲が最大効果範囲だ。

逆に言えばこんな近距離だからこそ相手の防御を崩せるのだが『接近短打』を主に置いているために攻撃できる範囲がどうしても短い。

だがその射程に入り技が決まれば相手は吹っ飛ばかそれに耐えたとしても内臓を経絡系を外から破壊する、まさに一撃必殺と言っても過言じゃない。

言ってしまうえば、ゼロ距離で相手に向かって大砲をぶっ放つ一撃必殺命みたいな。

初見でそれを見破れるとは思えない。

それに、相手の懐に入り込んでから攻撃するパターンなど山ほどある。

でも、アーチャーはまるで僕が八極拳を使うことを知っているかのように、懐に入らぬように双剣を振るう。

「くそー」

無理に突き出した拳を剣の側面で受け流され、お返しとばかりに鋭いけりが再び突き刺さる。

僕は再び吹き飛ばされるがすぐさま立ち上がろうとするがすぐには立ち上がれない。

くそっ！ 内臓にさっきの一撃が響いてる。

衛宮は白と黒の双剣を生み出してはそれをごとごとく破壊され斬りかかるアーチャーに再び同じ剣を生み出して重ねてガードする。

しかし、ガードした剣はすぐに砕け散る。

そしてあの剣を生み出すたびに衛宮はひどく疲弊している。

「ふん。どうやらその魔術行使に体がついてきてないようだな」

「う、うるさい！ お前に言われなくても俺は……！」

衛宮が新たに剣を生み出す。
それをアーチャーが破壊する。
新たに生み出す。
破壊する。

この繰り返しだった。

くそ……情けない。なんのために10年も鍛錬を重ねてきたんだ……。

「ぐだおくん。あなた大丈夫なの!？」

僕の方に走り寄ってきた遠坂さん。

「僕は、大丈夫……ごふ！」

口から血を吐いてしまう。

やばい。内側に響くな……。

「そんなので大丈夫なわけないでしょう!？」

情けない。本当に情けない。

遠坂さんが宝石を取り出して僕に回復魔術?をかける。

「遠坂さん……」

「何よ。今はじつとしてなさい!」

「たぶん、衛宮の奴はもう持たない。だから、一流魔術師の遠坂さんに頼みがあるんだ」

「何よ……場合によっては張り倒すわよ」

マジすか……。

でも、これは一か八かの賭けだ。

「僕の考えに乗ってほしい」

* * *

これで、いくつ目の投影だろうか？

投影するたび減っていく少ない魔力。

打ち合う度に分かる剣の構造。

それを打ち消すばかりの地獄……。

打ち合う度に見せられるのは1を殺し9を生かすという合理的なことだった。

「ふんー！」

「があー！」

アーチャーの力に押し負け俺の投影した干将獏耶は砕け散る。

「ツー！ お前は、俺の一体何なんだ！」

自然と漏れた疑問。

お前は、本当に……誰なんだよ。

「愚門だな。衛宮士郎、一つ言えることは借り物の理想をいつまでも抱いているようならば。理想を抱いて溺死しろ！」

アーチャーが干将を振りかぶる。

「うるさい！ 俺は、俺は正義の味方になるんだよ！ あの夜、爺さんと約束したんだからな！」

俺はそれを干将で防ぐが相手は腐っても英霊。

並の人間が受けきれはるはずもなく大きくバランスを崩す。

そして勢いよく放たれる蹴りが腹部に突き刺さる。

「かはっー！」

「士郎ー！」

俺は何度も地面をバウンドしながら遠坂に受け止められる。

くそっ……。

何度も打ち合う度分かるのは絶対的な差。

でも、何故だろうか。それでも、あいつには絶対に負けたくないと思ふ俺がいる。

「ぐっ……。」

腹部を抑えながら悶絶する。

その間に遠坂からの念話に耳を傾ける。

……分かった。

遠坂を、ぐだおを信じる。

俺は、干将獏耶を再び投影する。

たぶん俺の投影できるのは干将獏耶6本がせいぜいだ。
ならばやることは決まっている。

そのすべての力を次の一撃にすべてをかけることだ。

* * *

いい、士郎。これは本当に一度つきりの大博打よ。失敗したら本当に後がないんだからね。それだけはしっかりと覚えておいて

「躲さないでよね。高いんだから！」

遠坂さんが毒づきながら詠唱をしてアーチャーめがけていくつもの宝石を投げる

「Sechs, Ein Fluss, ein Halt！」

それをアーチャーは双剣で迎撃。宝石を難なく破壊していく。

するとその破壊された宝石はアーチャーを含めの周りを一瞬にして凍り付かせる。

「よし！ かかった！」

渾身のガッツポーズを決める遠坂さん。

そして間髪入れずに次の宝石を投げる。

「Fünf, Drei, Vier……！」

Der Rise und brennt das ein Ende

「くっ！」

煌びやかに光った宝石は、アーチャーの体に張り付いた氷が彼の動

きを阻害して、迎撃は不可能にされた。

ここで初めてアーチャーから苦悶の声が漏れる。

アーチャーは遠坂さんの炎の攻撃をまともに受けた。

爆炎が辺りを包み込む。

やったか……？

「さすがは五大元素使い^{アベレージ・ワン}。といったところか」

煙の中から聞こえる声からして大してダメージを受けたような感じには見れないアーチャーだった。

「凜。残念だが、あの程度では目くらましにしかならんぞ」

残念だけど、その目くらましで十分なんだよ！

「はっー！」

衛宮が両手に持っていた白と黒の双剣をアーチャーめがけて投げつける。

白と黒の剣は互いにひかれあいアーチャーを中心に交わる。

「言っただろう？ 目くらましにしかならんと。それぐらいはお見通しだ」

そういつて弾かれ砕かれる衛宮の4本の剣。

「次に来るのはお前であることは読んでいるー！」

正面から飛びながら切りかかりアーチャーが迎撃態勢をとる。

そして衛宮が切りかかる前に衛宮めがけて振りあげられる白い剣。

白い剣は衛宮の体を切り裂いた。

「!？」

正確には切り裂いたと錯覚させられた。

「まさか……!？」

「そのまさかだよー！」

アーチャーが僕の姿を確認したときは既に遅い。

震脚を踏み相手との間合いを氷の上を滑るように一気に詰める技。

その名を活歩^{かつほ}という。

アーチャーが距離を取ろうと体重を後ろに乗せる。

射程範囲内に入ったアーチャーを僕は絶対に逃さない。

「発勁」

アーチャーめがけて放たれた極限の一撃。それは例え英雄であろうと効果はあられる。どんなに優れているように同じ人間だ。今は影となつていようが実体があるなら……。

「がはっ！」

僕の一撃を受けたアーチャーは字のごとく至近距離で大砲で撃たれたかのように吹き飛ぶ。

ここで種明かしをしよう。

さつき、アーチャーが衛宮を切り裂いたと錯覚したのは遠坂さんが仕込んだあの攻撃にある。

遠坂さんの最初の氷での攻撃。

そこで生み出された氷を次の炎の攻撃で溶かされた時に出る『水蒸気』を使った陽動。

水蒸気によって生み出された虚像をアーチャーは実像だと勘違いした。

勘違いさせられたのだ。

虚像を実像に勘違いさせられたのは遠坂さんのガンドを受けたからだ。

遠坂さんが指先から放っていたのが『ガンド』と呼ばれるものらしい。

ガンドは当たると相手の体調を崩させるものらしい。

そのガンドのせいでアーチャーは自分が気付かないほどではあるが感覚が鈍ったからだ。

そこで衛宮の三連撃での攻撃。

これはガードする。いや、してくる。と踏んだ。

そのガードに気が回っている間に活歩で僕の有効射程内まで接近。最後に僕が研ぎ澄まされた極限の一撃を叩きこんだわけだ。

「まさか、本当に成功するとは思わなかったわ」

遠坂さんが嘆息しながら僕に言う。

「僕も本当に成功するとは思わなくて」

「お前な……。俺は虚像とはいえ切り裂かれたんだぞ……」

実は僕の中でのこの作戦は本当に博打に近い。

どこか一つでも失敗すればゲームオーバー。失敗は何一つ許されない極限状態での作戦だ。

それをやってのけた遠坂さんと衛宮は本当にすごい。

「早くここから離れよう。アーチャーの攻撃には手応えは感じたけど、まだ安心できないから」

「それもそうね」

僕の意見に賛同する遠坂さん。

こうして僕たち三人は衛宮を先頭に次に遠坂さん最後尾に僕という順で歩き始める。

少なくとも遠坂さんは女の子だ。

僕たち男が守らずにして男は名乗れない。

って衛宮は恥ずかしそうに言っていた。

そして、ふと思う。

離れるといっても僕らはどこへ行けばいいんだろうか？

一瞬、僕の視界に何かが移った。

……気のせいか？

「それよりも、遠坂。次はどこを目指すんだ？」

衛宮が振り返りながら遠坂さんに聞く。

僕。要らないんじゃないの？

「そんなのわからな——士郎！ 危ない！」

「え？」

遠坂さんが衛宮を突き飛ばす。

次の瞬間、遠坂さんの左胸に短刀が突き刺さっていた。

* * *

Death surprises us in the mid

s
t

o
f

o
u
r

h
o
p
e
s.

ACT06 契約

我々人間は希望に燃えている真最中に、突然死による不意打ちを食らわせられるものである。

* * *

「遠坂!？」

「衛宮! 彼女の処置は任せる!」

僕は衛宮たちを背後に庇う形で周囲の気配を感じ取る。
次に攻撃が来ても対応できるようにだ。

「……………」

遠坂さんをやったとみられる気配を感じ取れなかった。

気配を感じさせずに遠坂さんの左胸に短刀を投擲して命中させる
ことを鑑みれば…………。

「暗殺者か…………」
アサシン

気配を感じさせずにあんな攻撃を繰り出せる時点で卑怯極まりないが、今のこの現状でそんなことを言っても泣きごとにしかならない。

しかし、何故だ?

もし相手がその気になればさつき相対したアーチャー以上に僕たちを殺せるはずだ。

なのに、なぜ…………?

僕の頭をフル回転させて考えを張り巡らせる。

「!」

そして追い打ちをかけるように僕は背後から弓兵と似た気配を感じ取る。

あいつ！ もう追ってきたか！

「衛宮、遠坂さんの傷は!?」

「わからない！ でも……血が止まらないんだ！」

衛宮が必死になって止血作業を進めているが血が止まらないらしい。

その状況下でこれだよ。

くそっ！

前門に暗殺者、後門に英霊とはね……シヤレにならない。

相手も互いのことを認識しているのか動きがない。

どっちが先に動くかわからない以上、下手に動けない。

つまりどうしても後手に回ってしまう。

くそ……！

とつさに後ろの相手を確認するために振り返る。

が、その選択は――

「背ヲ見セタナ。愚カ者メ」

背後から聞こえた声。

間違いだった。

とつさに振り返る。そこにいたのはアーチャーと同様の人の形をした影。

避けないと！ と脳が命令するが、本能が告げる。駄目だ。間に合わない……！

「アンサズ！」

声と共に炎の塊が僕の真横を通り過ぎる。

「アサシンらしいちやらしいが、俺はそういうこそそしたの嫌いなんだよ」

声の主は姿を現した。

手に杖を持った青髪の男性だった。

男性は杖を影に向けて言う。

「どうする？ まだやるかい？ もっとも俺はここの坊主どもの肩を持つがな」

「……」

影は静かに消えていった。

先ほどの気配が遠ざかっていくのがわかった。
逃げたか……。

いや、この場合は見逃してくれたと言ったほうがいいのか。

「遠坂！ おい、返事しろよ！」

僕の後ろでは衛宮が涙を流しながら遠坂さんをゆする。

……。

男性は走りながら衛宮に支えられている遠坂さんに近づく。

「坊主。ちよいと見せてみる……駄目だ。心臓を一刺しか……悪いな、坊主。俺も万能じゃないねえから……すまねえが無理だ」

半ば諦めの声と共に謝罪を言う男性に衛宮が吠えた。

「……なんだよ！ あんたは！ 急に出てきて！ あんたがもつと早く出てきていけば遠坂は……！」

衛宮は男性の胸ぐらをつかみその目を見つめる。

「よせ、衛宮。この人に食って掛かっても何も起こらないぞ」

僕は離れると肩をつかむが衛宮はそれを振りほどく。

「俺は『正義の味方』になるんだ。でも……」

衛宮は涙をこぼしながら吐露する。

「俺の理想はあいつアーチャー言う通り、爺さんからの借り物だ。でも……でもっ！ 人を守りたい、人を助けたいって思いが間違ひなんかじゃない！ 大事な人を守れなくて何が正義の味方だ！ 俺は……何も守れちゃいない。自分の身を滅ぼしてでも守らないといけなかった！ 藤ねえも慎二も美綴も一成も桜もイリヤもセイバーも……絶対に守ると決めた遠坂も守れなかった！」

「坊主……」

男性も感じ取ったその正体。

僕にも分かった。

嗚呼。これが衛宮士郎エミヤシロウという男の『歪み』か。

「はあ……はあ……はあ……」

息を切らし涙をなんでもぬぐう衛宮を僕は見ていられなかった。それを見て苛立っていた者が一人いた。

アヴェンジャーだ。

「あんだねえ。さつきから聞いていれば本当に苛立たしいわね。自分の身を滅ぼしても守らないといけないものなんてないのよ！ その先に待っているのは破滅だけなのよ。守れないなら死ぬ物狂いで守ればよかったじゃないの。終わったことをいつまでも引きずって生きるのなら、その思いを抱いて溺死なさい！」

僕の胸ポケットから衛宮を指さして怒りながら言うアヴェンジャー。

「……一人にさせてくれ」

遠坂さんの亡骸の横に座り衛宮は僕と男性に言う。

僕たちは顔を見合わせその場から少し離れることにした。

男性と共に少し離れたところで腰の高さに合った瓦礫に腰を下ろす。

「こんな空気で悪いが、本来ならあの坊主にも紹介したいんだが軽い自己紹介だ。サーヴァント、キャスターだ。キャスターって呼んでくれ。坊主名前は？ それと胸ポケットのそいつは？」

男性が僕に自己紹介を求めてくる。

「僕はぐだお。胸ポケットの彼女はアヴェンジャー。さつきは助けてくれてありがとう。あの時キャスターがいなかったら間違いない死んでいたから」

礼を言っているが僕は少なくとも警戒心は解いていない。

僕の知っているサーヴァントとはアーチャーやアサシンのように影のようなのしか知らないからこそ影ではないがサーヴァントであるキヤスターに警戒心を持たざるをえない。

「礼を言っている割にはずいぶん警戒してるじゃねえか。そんなに信用ないか?」

「まあね。僕の知っている限りじゃサーヴァントっていうのはアーチャーやさっきのアサシみたいに影みたくないやつだからキヤスターみたいなのは警戒心を持たないほうがおかしいよ」

「そうかよ」

キヤスターは頭を掻きながらぼやく。

「とりあえず、ぐだお。今までの事の顛末ってやつを聞かせてくれ。そうしないと今後の行動にも支障をきたすかもしれないよ」

キヤスターが真剣な顔で僕に言う。

僕はキヤスターに事の顛末を話した。

教会で遠坂さんと衛宮に今の現状を聞いたこと、アーチャーの襲撃を受けたこと、その襲撃からなんとか逃げてきたこと。

そして、逃げている最中にアサシンによって遠坂さんが殺されたこと。

「ふむ……完全に俺が悪いな……」

キヤスターが頭を抱える。

「そうよ。この駄犬」

胸ポケットから顔を出すアヴェンジャー。

恩人に向かって何を言うかと思えば……。

「犬っていうじゃねえ!」

頭を抱えていたキヤスターが吠える。

何、この素晴らしいまでのいじり。

「というか『犬』って単語に過剰反応しすぎでしょう。」

「アヴェンジャー。もしかしてこのワンちゃん知ってるの?」

「知るわけないじゃない。こんな駄犬」

「二人をそろって犬って言うじゃねえ! それとさつきまでまともだったぐだおはなぜこうも簡単に手の平を返す!?!」

キャンキャン！ と吠えるキャスター。
何故だろう。

この心をくすぐるような何とも言えぬ快感は。

不意に、麻婆神父と金ぴかの王様と外道聖女が脳裏をよぎった。

これが愉悦か……。

「そもそも、あんたが早いタイミングで私たちに接触してきたのなら、ぐだおは目の前のアサシンの対応だけで済んだ。それなのにあんたはアサシンと挟み撃ちするような形で迫ってきたのよ？ 結論から言うとあんたの配慮不足。完全にあんたが悪い。だから駄犬なのよ」
アヴェンジャーがすごくまともなことを言っている。
さりげなく煽りながら。

正論だ、とばかりにキャスターは僕の胸ポケットにいるアヴェンジャーを見つめる。

「ああ。確かに、俺が悪い。俺がお前たちと速いタイミングでコンタクトを取っていたのならば……あのような結果にはならなかった」

「反省しなさい」

「……なに、この主従。微かに元マスターと同じ匂いがするんだが……」

やっぱりキャスターはワンちゃんだった。

* * *

俺は遠坂の亡骸を横たえ、その隣に座り語り掛ける。

「なあ、遠坂」

「……」

「俺さ、考えたんだ。『正義の味方』ってなんなんだろうって」
「……」

「『正義の味方』って困っている人に平等に救いの手を差し伸べることだと思っていたんだ。例えそれが自分の身を犠牲にしたものだとしても」

「……」

「でも、それは遠坂が俺の『歪み』だって言ったの、覚えてるか？」

「……」

「確かに、俺の持つこの理想は『歪み』にほかない。でも遠坂は本当にお節介だよな。自分事よりも俺のことを気にかけてくれてさ」

「……」

「俺、この聖杯戦争が終わったら……理想を追うのをやめて自分の為だけに生きるって決めたんだ」

「……」

「だから……戻ってきてくれ……ッ！ 遠坂！」

双眸から再び涙が零れる。

涙をぬぐい遠坂の頬に触れる。

温かかった彼女の頬がとても冷たい。

あの時と……桜を助けることができなかった時と一緒じゃないか！

己の無力さをあれほど呪ったことはない。

今でも呪っている。

俺の力がなかったせいで桜を守ることができなかった。

俺を守ろうとしたがために藤ねえは身を挺して死んでいった。

俺の力になろうとして助けてくれた姉すらも守れなかった。

俺に信頼を置いてくれた自分の剣すら守れなかった。

今も……俺を庇うがために死んでいった遠坂。

遠坂……。

俺、少し疲れたよ。

すると背後から気配を感じた。

ぐだおとさっきの男性だ。

「……衛宮」

ぐだおが俺の下へ歩み寄る。

「なんだよ。俺は少し疲れたんだよ」

力なく座り込んでいる俺にぐだおは……。

「衛宮……歯あ食いしばれ！」

バキッ！

鈍い音が俺の頬から発せられる。

今まで1度も見たことがないぐだおの表情。

ぐだおは俺の胸ぐらをつかみ無理やり視線を合わせる。

「衛宮。何をしてるんだ？ お前の夢は……お前の理想は『正義の味方』になることじゃなかったのか？」

「……俺は少し疲れたんだ。少しくらい休んでも罰は当たらないだろ」

「そんなことでお前の理想は終わっていいのか!? お前は既に『答え』を持っていてるんだろう!? 自分の『歪み』に対する答えを！ それともお前の出した『答え』すらも偽物だったのか?」

不意に遠坂の言葉が脳内で再生される。

『旅の始めと終わりにははじめが欲しかったーなんて心の贅肉ね。人の生き様はおわらない旅路みたいなものなのに』

「みんな、みんな俺を助けようとしてみんな死んでいったんだぞ！

俺だけが生き残っているこの現状で、お前に何が言えるんだよ！」

叫びながらぐだおをなぐり返す。

殴られたぐだおはそれでも視線を俺から外さない。

「……なあ、衛宮。お前なら分かるはずだ。今、お前がしなければならぬことを」

ぐだおが静かに語り始める。

「もし、あの場面で死んだのが遠坂さんじゃなくて僕だったら？

衛宮、お前はこうやってもう疲れた。とか言って自分の理想を捨てるのか?」

「何をわけわからないことを——」

「僕が死んで遠坂さんが生きていたならこうもぐじぐじしてないだろ

うね。彼女の本性をついさつきまでは知らなかったけれど、彼女はきつと割り切るタイプだと思うよ。僕と正反対の人種だと思うからね」

「……何が言いたい？」

「遠坂さんのことを忘れろとまで言わない。もし、お前がまだ『正義の味方』の理想を追うのであれば割り切って立ち止まるな。前へ進め。止まったらお前はもう走れなくなるだろう？」

「俺の理想……」

あの夜を思い出す。

『僕はね、正義の味方になりたかったんだ』

『なりたかったって、あきらめたのかよ』

『ヒーローは期間限定でね、大人になると名乗るのが難しくなるんだ』

『それじゃあ、しょうがないな』

『うん。しょうがないから——俺が代わりになってやるよ』

『爺さんの夢は……俺がちゃんと形にしてやるから』

『……ああ。安心した』

そういうと爺さんはもう二度と目を開けることはなかった。

俺に己の理想を託して……。

爺さんなら、こういう時どうしただろうか？

やっぱり、ぐだおの言う通りに割り切るだろうか？

俺は爺さんとは違う。

でも、同じ理想を追い求める以上は……。

「そうだ……。俺は正義の味方にならないといけないんだ。こんなところで立ち止まったら、遠坂に嫌味を言われるな……」

「ああ。嫌味を言われるならさ。自分の理想を達成したとき、遠坂さんに自慢してやれよ。『俺は正義の味方になったぜ！ ざまーみろ！』」

「……」

「そうだな」

笑みを見せるぐだお。

その笑みに俺も笑みを作る。

「それなら、やらないといけないことは決まったも同然だね」

「ああ。俺たちは……」

「アサシンの奴を完膚なきまでぶっ潰す！」

ぎゅっ！ と互いの手を握りしめ、宣言する。

ああ。俺はアサシンを許さない。

覚悟しろよ。アサシン、例えお前が英霊であろうと俺は必ずお前をぶっ潰す。それも完膚なきまで。

* * *

「さて、今後の目途も立ったことだし、改めて紹介させてもらうぜ。サーヴァントキヤスターだ。よろしくな、坊主」

「ああ。よろしくな。キヤスター」

衛宮とキヤスターが握手を交わす。

「お、お前さん。令呪を持っているところを見ると……元マスターか？」

「ああ。セイバーの元マスターだ」

「それなら、俺と再契約してくれないか？ 俺もこのまま野良サーヴァントを続けてたらいつかは魔力切れを起こして座に返還されることも考えられるからな。俺のマスターになることでいろいろと便利なことがあるかもしれないぞ？」

「……ぐだおじやダメだったのか？」

おい。衛宮。何を言ってるんだ。

僕にはすでに契約？ をしてるサーヴァント（笑）がいるんだよ？

僕がやってみろ、既にアヴエンジャーが胸ポケットから「契約したら丸焼きにしてやる」みたいな嫉妬の視線が突き刺さってるのよ？」

「ああ。俺もそつちのほうがいいと思っただが……」

「あれか……」

ねえ、なんで二人して僕の胸ポケットに目を向けるんですかね？

確かに既に契約してる身ですけど、厄介なやつがいるからみたいな視線はやめていただけませんか？

「とりあえず、俺と契約してくれるか？ 坊主」

「やってやるよ。それと、坊主じゃない。衛宮士郎だ」

「わーったよ。シロウ。それじゃあ、呪文を頼むぞ？」

「え？ 再契約するときに呪文なんているのか？」

ここからキャスターと衛宮が再契約するまで10分ほどかかった。

新たに僕たちのパーティーに^{ワンちゃん}キャスターが加わった。

「明らかにこのルビに悪意を感じるんですけど!？」

* * *

Action may not always bring happiness; but there is no happiness without action.

行動は必ずしも幸福をもたらすものではない。しかし、行動のないところに幸福はない。

* * *

円蔵山、大聖杯前。

そこに一人の堕ちた少女が地面に漆黒の剣を突き刺し待ち構えている。

何を待ち構えているのか？

彼女は待っている。自分を受け入れてくれたマスターを。

騎士王としてではなく一人の女性として見てくれたあの赤銅色の少年を待っている。

嗚呼。今でも貴方が愛おしい。シロウ。

この地獄の中で貴方は生きているとは、私は思えない。

シロウ。願うことなら私はこのまま貴方と会うことなく座に帰りたい。

私は、外道に堕ちた。

だが私は魂まで堕ちたわけではない。

いかに聖杯で無理やり汚染させ黒化させようが、最優のサーヴァントたるセイバーの対魔力を侮ったようだな。

黒化しても一片の理性が残っているならば。私も十分だ。

聖杯などもう、どうでもいい。

あれほど固執していた聖杯による過去の改変。

だが、それよりも私は大事なものを知ることができた。

だがシロウは、そんな私を許してくれるだろうか？

己の手の両手に目を落とす。
こんなにも穢れた私を、シロウは……。
ふと、後ろに控える大聖杯に目を向ける。
願いを叶える万能釜たる聖杯よ。
もし、機能しているのであれば貴様を守護している私のささやかな
願いを聞け。

もう一度。シロウと――

ACT07 弓兵再び

僕たち一行は円蔵山の杯目指して行進中だ。

今の僕たちの目的は現在の杯の現状確認。それが終わり次第
アサシン抹殺だ。

キヤスターを先頭に衛宮、最後尾に僕といった並びでキヤスターが
索敵しながら慎重に進む。

それにしてもルーンって本当に便利だね。書いたらばー！ っ
て文字が浮き出てしゅぱー！ っって感じで索敵やってくれるんだから。
そのおかげもあってキヤスターと合流してから一度も敵と会って
ない。

キヤスター凄いい。正直、魔術師が強くなっただけのお上りさんだと

思って舐めてました。

キヤスター。本当にごめんなさい。君は最高のサーヴァントだ。

「……………」

ねえ、アヴェンジャー。

「……………それにしても熱いわね。ねえ、あなた水なんて縁起のいいものないの？」

「いやいや！ さっきまで胸ポケットにいたのにいつの間にも僕の頭の上にパイルダーオンしてるの!?!」

本当にさっきまで胸ポケットで人の気も知らないで爆睡してたのに…………。本当に気配感じなかったよ？ いつの間に移動したの？

そのアヴェンジャーは今、僕の頭の上で額をぺちぺちしながら水を要求してくる始末。

あの。アヴェンジャーさん？ 非常に言いにくいのですが歩くたびに君の鎧が頭皮に擦れて痛いんで辞めていただけませんか？ 頭皮ゴリゴリされて、そこだけ根毛死滅しそう。

…………あ！ 僕にも水ある！ 少々味に難があるが…………まあ、アヴェ

ンジャーなら大丈夫でしょう。

「僕の腰にあるバベルの塔から——」

「次の言葉を言った瞬間にあなたの両目は目玉焼きよ？」

「ド下ネタでごめんなさい」

ちくしょう！ 別にいいじゃないか！ 僕も日本男児だ！ 人並みの性欲はあるわ！

昔からそんな変な気を起こした瞬間にカレンに簀巻きにされて教会の外で蓑虫やられてたんだ！

別に少しくらいいいじゃないか！

「……………」

キヤスターと衛宮の「うわーなんて哀れなの」と言いたげな視線が突き刺さる。

…………もう泣いていいかな？

というより、僕。こういうキャラのポジションだっけ？

改めて僕は泣きたくなかった。

* * *

『答えは得た……。大丈夫だよ、遠坂。俺も、これから頑張っていくから』

円蔵山前、私は否。オレは聖杯にたどり着きそうな奴らを片っ端から排除している。

何故ならばオレにできることはおそらくそれぐらいだと思っただからだ。

エミヤシロウという壊れた男のできることは、黒化して身を外道になり果てようと変わらなかった。

オレは遠坂凜に召喚され、オレは冬木の聖杯戦争にアーチャーとして参加。

そして、衛宮士郎という男を見た。あいつはセイバーのマスターとして聖杯戦争に参加した。

理由は言うまでもない。かつてのオレもそうだった。だが、今の聖杯戦争はオレがやってきた聖杯戦争とは違う。

聖杯が暴走し、聖杯が何者かに破壊され一時的に途絶えた聖杯による魔力のバックアップ。

そこを狙われ、行動を共にしていた凜と衛宮士郎、オレとセイバーはマスターとの契約を切られ外部から持ち込まれた聖杯に汚染され、外部から持ち込まれた聖杯に直接契約させ直された。

オレは三騎士であるが所詮はまっとうな英雄ではないオレは高い

対魔力をもっていないから、すぐではないが時間がたつとともに聖杯に汚染された。

セイバーは騎士たる矜持か、はたまたセイバーが持つ高い対魔力のおかげか。完全に汚染されることはなく理性を保っている。

オレは考えた。

今のオレは聖杯に汚染された身でセイバーを救うことはできない。

今の衛宮士郎は確かに弱い。

だが、もし。あの時のように英雄王を退けるほどの力を身に付けさせれば……。

彼女を救うことができるかもしれない、と。

そのためには他のサーヴァントとの戦いで、それとオレ自身との戦いで固有結界の発動までしろとは言わない。だが、入り口には入れ。

だが、そこまででセイバーに届くとは思えない。

それを補うであろう存在がいる。やつ……ぐだおだ。

言峰綺礼を養父に持ちオレと同じあの地獄を生き延びた者だ。

八極拳の使い手であり、生前に遠坂と共に八極拳を教えてもらった。ということは覚えている。

特に親しいわけでもなかった。

普通に教室で挨拶を交わしあう、ただのクラスメイトだった。

それに、生前にオレが参加した聖杯戦争では、あいつがマスターになることはなかった。

そして少なくとも、オレが居たときは胸ポケットにあのような者は鎮座していなかった。

あの胸ポケットにいたのは、間違いなくサーヴァントではあるようだが……。

あんなに小さい英霊をオレは知らない。そもそも胸ポケットに収まる英霊なぞいるのか？

話が逸れた。話を戻そう。

だが、先ほどの戦闘で確信したことがある。

やつの……。ぐだおの拳は英霊に通じる。

それはオレが身をもって体験した。オレは曲がりなりにも英霊で

ありサーヴァントである、普通の人間がサーヴァントにダメージを与えることなぞ皆無だと思っていた。

だが、ぐだおはそれを覆した。

身体に響く五臓六腑を破壊しかねない威力に攻撃動作までの洗練された動き。

こいつらが、他の誰でもいい。サーヴァントを連れてくるのであれば……。

届くかもしれない。彼女に。^{アーサー王}

オレができなかったことをやつらならば、やってくれるのではないかと。

心のどこかで期待している自分に腹立たしいが、勝算があるならば賭けてみるのも悪くない。

記憶が摩耗し消えそうになっても忘れることの無い、薄暗い土蔵での彼女との出会い。

オレが愛した彼女を救うために……。

「……衛宮士郎。お前にアルトリアが救えるのか？」

再び彼らが対峙する時は……。

* * *

「まさか、一人で私を相手を取ろうとは。貴様も度し難い阿呆のようだな。衛宮士郎」

円造山の中腹で再び現れたアーチャー。

「……」

そうだ。アーチャーの言う通り、今の俺は1人だ。キヤスターとぐだおに無理を言っただけで1人で来たのだ。勿論ぐだおとキヤスターに無茶苦茶止められた。

『衛宮、本気で言っているのか!? あの時は3人で大博打に近い作戦で、やっと退けることができた相手だよ!? それを1人ってお前……』

『ごいつの言う通りだ。いくら何でも無謀すぎる。マスター。勇敢と蛮勇をはき違えちやいかねえ』

たしかに、無謀だ。正直、勝てるかも分からない。

でも俺は、あいつと……アーチャーと決着をつけないといけない。そこまであいつに固執する理由は、はつきり言っただけにもわからない。

それでも、これだけは言える。

あいつはどこか、俺と似ている気がする。

どこって言われたらどうも言えないが、でも。体の出来かた? 生き方? 見たいというかなんというか……。

うまく言い表せないけど、俺があいつを倒さないと前に進めない気がするんだ。

勿論、俺は死ぬつもりはない。

遠坂の仇を討たないといけない。

それ以上にあいつとの決着を付けなきゃいけないんだ。

『……分かったよ、衛宮。本当は縛りつけてでも行かせたくないのだけど、お前がそう言うということは何か勝算があるんだろう?』

……ぐだおの言う通りだ。

俺はキヤスターに無理を言っただけで発現させたものだ。

いわば未来の先取り、といったところだ。

それが、アーチャーに対抗できる俺の唯一の切り札だ。

『マスター。これはサーヴァントとして言っておくがアレを使いすぎるとお前は……』

分かっている。リスクも承知の上だ。
それでもしないと、あいつに勝てないから。

「……ああ、俺一人だ。そのほうがお前もいいだろう？ アーチャー」
俺は黒い影となったアーチャーを見る。

「……衛宮士郎。お前に一つ聞こう。貴様はまだ『正義の味方』などという下らない理想を追い続けるつもりか？」

「ああ。そのつもりだ」
即答だった。

俺が、俺自身がこの理想を捨てることはない。

「……ならば、ここで下らない理想を抱いたま『でも！』？」

アーチャーの言葉を遮り俺はアーチャーへ語る。

「俺はたしかに『正義の味方』なんて言うものを追いかけると、いつか自分が消えるんじゃないかって……時々そう思う」

「それを理解しているならば、何故その道を歩もうとする？」

「それが……俺という、衛宮士郎にできることだからだ。人を助けたい。その思いが間違いなはずがない、そうだろう？ アーチャー……

いや、英霊エミヤ！」

こいつは、俺だ。

未来の俺自身。

己の理想に準じて朽ち果てた愚かな俺だ。

「……いつオレの真名にたどり着いた」

「お前の真名に、たどり着いたのはついさっきだ。前回の剣戟でいくつ打ち合ったと思っているんだ？ そのたび流れてくるのはお前自身が見てきた地獄だった。最後見た、あの10年前の誰も助けてくれない絶望の中での、充満する死の風景だった。この記憶を写し出せるのは、衛宮士郎をおいて他にはいない。それと、打ち合っていく度に分かる剣の基本骨子、創造概念、戦闘方法。それは何故か俺自身の体にすぐに馴染んでいった。理由はそれが衛宮士郎にとって一番いい

戦い方に他ならない」

「それらがわかっついていてなお、お前はその道を行こうというのか！」
「そうだ」

アーチャーが怒るのも無理はない。

何故なら俺が辿る終着点は己の理想に準じて朽ち果てる。という未来だからだ。

でも、俺の答えはそんなものじゃない。

「お前は……セイバーをアルトリアを置いていくつもりか！」

アーチャーが吼える。

それは、エミヤシロウという男の魂の咆哮だった。

「違う！ 彼女を……セイバーを置いていくことなんてしない！」

それをすぐさま否定する。

否定しなければ、ならなかった。

あいつを肯定すれば、確実に俺の負けだと思っからだ。

「ならば、どうというんだ！ 答えろ！ 衛宮士郎！」

「俺は……彼女をセイバーを救う。幾万の人を助けることは無理だ。俺にできるのは……手に届く人だけを救うことだ。セイバーを救う。それだけの、たったそれだけのちっぽけな正義の味方でありたい……」

胸に右手を当て目を瞑る。

——ドクン

胸が大きく鼓動する。

銃の撃鉄を落とす。同時に身体の回路が悲鳴を上げる。

分を超えた魔術は人を滅ぼす。

そして静かに語るように詠唱を口ずさむ。

これから俺のすることは——

俺^{無限}自身への挑戦だ。

I am the bone of my sword.
体は剣で出来ている

俺が挑むは俺自身。

Steel is my body, and fire is my blood.
血潮は鉄で心は硝子

俺が辿るはずだった未来の俺があいつだ。

I have created over a thousand blades.
幾たびの戦場を越えて不敗

ただ理想を追い続けた男の末路。

Unaware of loss.
ただ一度の敗走もなく

まるで鏡を見ているようだった。

Nor aware of gain.
ただ一度の勝利もない

理想は同じはずなのに。

Stood pain with inconsistent weapons,
担い手はここに独り

思うことが違えば、変わってくる。

waiting for one's arrival.
己の体で剣を鍛つ

俺の理想は借り物に過ぎない。

my flame never ends.
わが生涯は今だ果てず

衛宮切嗣という男が残したいわば呪いのようなもの。己を殺して

でも救うという機械じみた人生に。

My whole life
されど、この体は

その運命に。

life was
いずれ至る

今、俺はここで――

” Limited/zero over
” 剣戟の極致へと”

己の運命に己の意思で抗う！

俺の手には一振りの銘も無き刀。

左半身に魔術刻印を宿し赤い射籠手を纏う姿に変わる。

「……それがお前の『答え』か」

この姿を見たアーチャーから零れた小さな言葉。

そうだ。これが俺の出した答えだ。

収斂こそ理想の証だ。

刀を構え、アーチャーへと駆け出した。

「いくぞ、アーチャー。武器の数は十分か！」

ACT08 理想

辺りに響く金属音。

交わされる剣戟。

衛宮士郎という男はエミヤシロウという存在^{頂点}に負けるわけにはいかない。

エミヤシロウという男は衛宮士郎という存在^{原点}に負けるわけにはいかない。

「うおおおー！」

士郎が上段から振るわれる刀の一撃をアーチャーもといエミヤは、二刀の夫婦剣で受け流す。

「ふっー！」

そして受け流すと同時に間髪入れず干将を横風にふるう。

それを士郎はバックステップで回避しエミヤと距離をとる。

エミヤは畳みかけるように追撃をかける。

地面を蹴り士郎へと肉薄する。

その間合いは刀の間合いではなくエミヤの持つ干将・莫耶の間合いだ。

繰り出される莫耶の強烈な刺突を刀の腹で受け、その刺突の勢いを借り改めて距離をとる。

そして、エミヤも今の一撃で確信を得た表情をする。

「なるほど。固有結界を体内で展開し、その刀に固有結界の剣を抽出しているというわけか」

エミヤは今の莫耶での刺突をすともにあの刀に直接、解析の魔術をかけた。

するとどうだろうか。

あの刀はただの刀ではなかった。

それはまるで鏡のように、固有結界の世界を刀に映している。

つまり、衛宮士郎という男の剣製はエミヤシロウの知る剣製。
『無限^{Unlimited}の剣^{blade}製^{works}』ではない。

エミヤシロウの用いる無限の剣製は、本当の意味での固有結界だ。

そもそも。固有結界とは。術者の心象風景をカタチにし、現実に侵食させて形成する結界であり、最も魔法に近い魔術とされ魔術の到達点の一つとされる。

現実世界を塗り替えるほどの力を持つがゆえに、固有結界を維持できる時間は非常に短い。が、その力は絶大である。

エミヤの中で腑に落ちないところが一つある。

何故、衛宮士郎はこの短時間でここまで固有結界を使いこなせるようになったのか？ と。

「――戦闘中に考え事かよ」

「……ッ！」

距離をとっていたはずの士郎がエミヤの眼前に迫っていた。

上段から振り下ろされる銘も知らぬ刀。

その一瞬がエミヤの命取りとなる。

「ちっ」

小さく舌打ちをし手に持っていた干将・莫耶を爆ぜさせる。

士郎は眼前で爆ぜた干将・莫耶への対応が遅れ爆風の餌食となる。

エミヤは爆風に揉まれながらも、それ利用し士郎と距離を取りながら

黒弓と螺旋状の剣一本を投影。

素早く弓にその剣を番える。

「くっ！」

士郎が状況の整理と打開策を頭で必死で絞り出しているなか、エミヤは土煙が晴れその真名を開放するのに、それほど時間は必要なかった。

エミヤが投影したのはケルト神話において、3つの丘を切り裂いたといわれるフェルグスが使用していた剣を、自らの手で改良し一番効果を発揮するものに作り替えた矢である。

「I am the bone of my sword」

銘を

「カラドボルグII偽螺旋剣！」

放たれた矢は周囲の空間を削りながら士郎めがけて突き進む。

士郎は身体を大きくねじる。が、矢から目は逸らさない。

「抽出――」

――固有結界より選択

――虹霓剣を選択

――迎撃を開始

開始！――」

士郎の手にする刀がまばゆい光を放つ。

それは今、エミヤが放った矢つるぎのあるべき姿にして本来の姿。

その銘を――

「偽・虹霓剣カラドボルグツツ！――」

横凧に放たれた斬撃は矢とぶつかりせめぎあい、共に限界が来たとばかりに爆ぜる。

木々が根元から折れ、草木は燃え始める。

この戦闘において、生き残ったのは……ただ一人。

ACT08 剣戟が残したもの

士郎とエミヤが戦っている一方、僕とキヤスターは一体の影と対峙していた。

それは衛宮が一人で戦っている戦闘で、その横槍を入れる輩を止めるためだ。

先ほどから対峙し何度か打ち合っているが、相手は1人に対し、僕らは2人。

キヤスターの強化のルーンで体を強化しキヤスターは後衛から火

球で攻撃している。

にも拘わらず、相手は一向に撤退しない。

何を狙っているのは知らないが、衛宮早く帰ってきてくれ。

「……イイ加減ソコを退カレヨ。名モ知ラヌ者とキャスター。拙僧ハ無益ナ殺生ハ好カン」

僕とキャスターが対峙しているのは如何にも武人らしい雰囲気を漂わせる者だった。

手にしているのは槍……いや、刃がやや湾曲しているところから見て槍のように突き刺すのを重要視したものではない。あれは、切ることを重要視してあるものだ。

ということは相手の武器は薙刀。

そしてそのクラスに当てはまるとすれば……。

「ランサー。お前は何しにきやがった？ 俺のマスターの邪魔しに来たのか？」

ちっ。と舌打ちしながらキャスターが僕のセリフを奪い去る。

「……ぐだお。悪いがお前、もしかしてさつきからランサーつてことに気付かなかったのか？」

ジト目で僕を見るのはやめて！

「ま、気を取り直して。悪いがここから先は通すわけには行かねえ。諦めて座に帰んな」

先ほどの空気を一変させるように鋭くなるキャスターの目つき。ゆっくりとキャスターは再び杖を構える。

それに合わせるようにランサーも薙刀を構え、僕も腰を落とし低く構える。

「「……」」

一陣の風が吹き、葉の燃えかすが舞う。

そして、キャスターとランサーの間に舞い込んだとき。

「アンサズー！」

先に仕掛けたのはキャスターだ。

ランサーめがけて幾重もの火球を放つ。

「カツー！」

ランサーの一喝と共に振るわれる薙刀で火球は全て切り裂かれる。

「ちっ！ これだからキャスターは！ ぐだお！」

「わかってるよ！」

この一つの攻防の間にランサーの槍の間合いから、僕の八極の間合いに潜り込まんとランサーに迫る。

「まだまだ、行くぜえ！ アンサズ！」

キャスターは僕に火球が当たらぬように配慮しながらランサーめがけ牽制の火球を幾重にも放つ。

ランサーは薙刀を回転させすべての火球を打ち消す。

槍とは長いリーチゆえにミドルレンジからの攻撃を可能とし、刀などの間合い潜り込ませることをさせず一方的に攻撃できる最大の利点がある。

ランサーの持つ槍……というか薙刀は目測でも2mはある。

つまり最低でもやつのはリーチは2mはあるということになる。

僕の最大の射程範囲。それは自分の腕の届く範囲内。1mにも満たないかもしれない。

槍と拳では圧倒的に、槍の方に軍配があがる。

だが、例外も存在する。

槍の最大の利点。裏を返せば槍の間合いから刀の間合いとなるとその長さゆえに最大の利点を生かすことができずに終わってしまう。

防御のためにその長いリーチを引っ込め次の動作へつなげるためのタイムラグが生じる。

そのわずかな時間があれば――。

「ヌウン！」

声を張りながらランサーが薙刀で刺突を繰り返す。

サーヴァントの攻撃は例え低級であろうと常人が見切れるものではない。

でもね……。

僕を鍛えてくれたヒトは「フハハハ！」って高笑いしながら、容赦

なく剣や槍を出し惜しみせず放ってくる王様と。

人の理と共に人の歪みと共に、この八極を手ほどきした養父と！

幼い僕に黒鍵の扱い方を叩きこみ、最終的にはトラウマを植え付けたあの――。

「カレー中毒者のせいだああああああああ！」

いつしか叫んでいた僕はわずかな動作で刺突を回避しランサーの懐へ滑り込むように潜り込む。

未だ極めずの技を使うのはリスクが高い。

しかしこの状況で、どうこう言っても仕方がない。

だからこそ、思い描け。

李氏八極拳の開祖、李書文はこういったそうだ。

『千招有るを怖れず、一招熟するを怖れよ』
と。

つまり！ 多くの技を身に付けるより、ひとつの優れた技を極めろ
ということだ！

だから僕は研磨し続けた。己の持つ最大の武器にして人の誰もが
持つ最強の武器を！

だがいくら研磨しても足りない！

ならばどうすればいい？

補えばいいんだよ。己の覚悟で、己の意思で、己の胆力で！

ランサーを横風に薙刀を振るう予備動作が見えた。

でも、僕のほうが早い。

フェイントなんて小細工は無しだ。

受けてみる。これが僕の最大の拳法だ！
ぶき

「我が八極に二の打ち要らずッ！」

李書文の格言を口ずさみながら僕の右肘がランサーの左胸に突き

刺さる。

確信のまま、僕はそのままさらに足を踏み込む。

「憤ッー！」

気合いと共に放たれる一撃はランサーを吹き飛ばすのには十分だった。

ランサーは何度か地面でバウンドし薙刀を杖代わりにして立ち上がる。

腐っても英雄、か……。

やはり……だが、まだ研磨するだけの伸びしろはあるな。

自分の技のことを頭で考えながら、相手の出方を窺う。

「ひゅー。まじかよお前。いくらお前の体を強化したからとはいえ、英霊を吹き飛ばすとかもはやバケモノの類だぞ」

後ろからキャスターが茶化しながらやってくる。

まだ戦闘の最中なのに、何故キャスターはここまでへらへらしているられる？

「あん？ お前な、流石にあんなすごい綺麗に貫いたら流石に体の内側に響くだろ。しかも、お前の使ったやつはあれだろ？ 八極拳ってやつだろ？」

「そうだけど……」

キャスターは杖を肩に担ぎながら解説を始める。

「知っていると思うが、お前と同じパワーの全力パンチをあいつに打っても確かに堪えるだろうが、あくまでそれは瞬間的な衝撃だ。お前の使っている八極拳……発勁なんかは同じパワーで打ったとしてもわけが違う。確かに最初の力の動きは鈍いがそれが長く続く。そう。例えるなら、地下からくる地震の振動が大型マンション3階の部屋の水槽に渦を発生させるように、今のあいつの体っても霊体の内側は千切れんばかりに揺さぶられてるわけだ」

願うことならくらいたくないものだ、おお怖い。

と最後に付け加えるキャスターをしり目に、僕は己の拳に目を落とす。

今の感覚は、たしかに技自体は決まった。

でも何かが足りない気がする。

重要であるようで、必要のないような何か。

「グツ……此方が手痛い目ニアウトは……ダガ此方ノ粘り勝ちのようだ」

ランサーが静かに消えていく。

粘り勝ち……？

どういう意味だ？

僕が頭で情報を整理しているとキャスターがビクリと体を震わせたかと思うと、歯噛みしながら持っている杖が折れるかと思うほどギリギリと握りしめている。

「くそつたれー！」

キャスターが急に踵を返し走り出す。

な、なにがあつた!?

僕はキャスターの背中についていく。

嫌な予感がした。

衛宮、まさかお前……

* * *

ぐだおとキャスターがランサーと戦闘を行っている中、俺とアーチャーの戦いは激しさを増していた。

「うおおおおおー！」

上段から振り下ろされる俺の刀をアーチャーは夫婦剣の干将・莫耶で受け止める。

「くっ……！」

アーチャーから苦悶の声が俺に届く。

俺はより力を籠めアーチャーの干将に罅を入れさせる。

それを見るなりアーチャーは英霊の筋力で刀を押し上げ後方へ飛びながら黒弓を投影、矢を放つ。

俺はそれを確実に叩き落していく。

一本、また一本と。確実に。

「どうした、アーチャー。お前の剣から戸惑いが感じるぞ」

ひゅっ。と刀を構えながらアーチャーに皮肉気と言う。

アーチャーは静かに俺の刀を見つめながら言う。

「解せんな。何故、それほど力を今の貴様が有している……」

「簡単なことだ。キヤスターのルーンで俺の持つ伸びしろを今使っているだけだ。それなりに危険を伴うがな……」

俺は自然と己の左肩の聖骸布に触れていた。

そして静かに手を放しその手の平をみる。

……ピシ。と小さく罅が入る。

他ならぬ俺の体から。

キヤスターは言った。

『シロウ、いいか。今からお前に施すルーンは『その者が持つ未来の力を無理やり今の自分に憑依させる』ルーンだ。ざっくり言うとな来の己の力を今のお前に移すものだ。それ故にそれ相応のリスクも伴う。それは——』

「本来は時間をかけて身に付ける筈の力を、無理やり今の自分に付け足すんだ。当たり前と言えども当たり前かもしれない。それ相応の対価だからな」

「随分と勿体付けるじゃないか。妙なところまで付け足されているが？」

「勝手に言ってる。俺の払った対価は……俺の全てだ」

「……全てだと？」

「ああ。俺の持つ全てをかけた。例えセイバーに殺されようが、俺の

命尽きようが、俺は……セイバーだけの正義の味方でありたい」
だから、と付け加え。

「お前が邪魔なんだよ！ エミヤ！」

言い終えると同時に俺は手にしていた刀を握りしめアーチャーへ
向かって駆ける。

アーチャーも再び干将・莫耶を投影し互いの中間で再びぶつかり合
う。

「お前は俺の描いた理想だ！ でもお前は間違っている！」

「そうだ！ だからこそ、その間違った芽をここで摘まねばならん！」

互いの獲物が鏝ぜりあう。

「でも！ 俺は護ることができなかった！ セイバーも！ 桜も！

藤ねえも！ 慎二も！ 一成も！ 絶対に護ると誓った遠坂ですら
護ることができなかった！」

「それが貴様の限界だからだ！ 最初から救うすべを知らずに足掻い
た結果だ！ 貴様は最初からヒトとして破綻していたんだ！」

俺とアーチャーの剣がぶつかり合う。

これはただの八つ当たりかもしれない。

俺が護ることができなかったことに対する、あいつへのただの八つ
当たりなのかもしれない。いや、これは完全に八つ当たりだ。

「でも！ 俺の理想を認めてくれる人がいた！ 例えその理想が間
違っていようが！ 俺はお前の理想には負けない！」

「貴様の下らん理想をまだ持つのであれば！ 抱いたまま溺死しろ
！」

片や理想を追い続けた果てに見出したのは全てを捨てても一を
守り抜く者。

片や理想を追い続け、己の全てを世界に売りなおもすべてを救おう
とした者。

どちらも正しい。

だが、どちらも間違っている。

だからこそ負けられない。

俺自身だからこそ、なおさらだ。

「俺の理想は……じいさんの願いは決して、間違いなにかじやなあああああい！」

剣というのは何度も打たれて打たれて強くなる。

エミヤという剣は折れていた。だが……。

衛宮士郎という刀は打たれてなお折れなかった。

収斂こそが理想の証。

全てを捨ててでも護り抜く。その決意こそが、衛宮士郎という男の示した道。

気が付けば、アーチャーは俺の突き出した刀を受け入れていた。

「……俺の勝ちだ。アーチャー」

「……ああ。そして私の敗北だ」

静かに消えゆく黒い影。

最後に俺に小さく耳打ちしてきた。

「その刀の銘はなんだ……」

「……『衛宮』だ」

しばらく考えたのちに出した銘にアーチャーは珍しく納得した雰囲気をだし最後に告げる。

「ここから進んだ先にある洞窟の奥に大聖杯がある。そこにセイバーもいる……」

それだけ告げと静かに消えてゆくアーチャー。

アーチャーが消えると同時に片膝をつき息を整える。

そして静かに立ち上がる。

これから、ぐだおとキャスターと合流してそれから――。

その言葉を境に俺の目の前が真っ暗になる。

…

…

…

やくそく……したから……

むかえにいくからな……

セイバー

ACT09 それぞれの思い

「……あれ？ 俺は、たしか……」

俺は気が付くとどこでもない、黄金に輝く草原の上にちよこんと鎮座している岩に腰かけていた。

「アーチャーと戦って、勝って……それから……」

ダメだ。思い出せない。

それ以降、何があつたかを思い出すことができない。

まさか、俺は……

最悪のことが頭をよぎる。

思わず頭を抱えその事実を否定しようとする。

不安と恐怖が俺を襲う。

俺は……！ 俺は……！

恐怖に押しつぶされそうになりそうだった時だ。

『『『しろー！』』』』

懐かしい声が聞こえる。

幻聴なんかじゃない。

たしかに聞こえたんだ。

思わず後ろを振り返る。

そこには、俺を信じてくれたヒトたちが手を振っていた。

『しろー！ 早くしないと置いてくぞー！ それとお腹が減ったから！ はやくうー！』

両手をを千切れんばかりに振っている藤ねえ。

『はやく来いよ。衛宮。お前がいないと、僕の良さが引き立たないだろ』

悪態をつきながらうつすらと笑みを浮かべる慎二。

『シロウー！ はやく来なさい！ ほら！ お姉ちゃんがついているから』

両手を目いっぱい広げて笑顔を見せるイリヤ。

『先輩。待ってますから、急がなくてもいいですよ』
髪をたくし上げ、静かな笑顔の桜。

『……土郎。答えは見つかった?』
笑顔を見せながら俺に問いかける遠坂。

その姿に俺の目からは思わず、涙が零れる。

そして、悟られぬように涙をぬぐうが涙が止まらない。
ぽん

俺の肩に誰かの手が置かれる。

ああ……。この暖かな手を、俺が忘れるわけがない。

『土郎、よく頑張ったね。お疲れさま』

いまままで変わらぬ声音のじいさん。

「う、うう……」

涙を必死にぬぐう。

でも、なかなか止まらない。

『行こうか』

じいさんの言葉に、無言でうなずくしなかった。

俺は立ち上がり、じいさんと一緒にみんなの元に歩いていく。

そして、みんなは笑顔で声をそろえて

『『『『おかえり!』』』』

「ただいま」

俺もそれに笑顔で答えた。

ナニカ、大事なものを置き去りにして……

くそつたれ!

俺は自分の落ち度に腹が立っていた。

いくらランサーと交戦していたとはいえ、マスターのことに気がいかなかったわけじゃない。

戦闘と同時並行で行っていた索敵は、確かに通常よりも範囲が狭まることぐらいは理解できていた。

だが……ッ!

己のクラスがキャスターであることを忘れ、ただひたすら走った。

「くそっ!」

ランサーで呼ばれなかったことを己が嫌になることは何度かあった。

だが、キャスターで召喚されたものは仕方ない。

俺がマスターに恵まれなかったことも、仕方ない。

生前、何度も重ねたゲツシュで己の身を滅ぼしたのも仕方ない。

そう割り切ることができる。

だが、今回ばかりは……!

男と男の戦いに、余分な横槍を入れるのも正直言うとな気が引けた。

だが、やはりマスターの身を案じるのであればやはりあの時に、無理やりにでも止めるべきだった。

しばらく走ると、開けたところに出た。

俺はそこで、信じられない光景を目にした。

そして、俺という英霊。クーフーリンは、この姿を忘れることはないだろう。

まさか、こんなやつが今の時代にいるとは思ってもいなかったから。

* * *

まさかとは、おもう。

嫌な予感しかしない。

キヤスターの背中を追い続け、しばらくしたら少し開けたところに出た。

そこに、キヤスターもいた。

僕は、ここで見た「衛宮士郎」という男の姿を忘れることはないだろう。

刀を地面に突き刺し、立ながら息絶えている。

口からは血が零れており、地面の血はまだ乾いていない。

体には、いくつもの切り傷がある。

それでもなお、倒れることの無い衛宮の姿。

そして、衛宮の手に収まっている刀には罅はおろか、疵一つない。

衛宮の心は鉄よりも強い。

まさに、それが具現化したように見える。

そして何より、彼は円蔵山を背にたっている。

まるで、「ここを死んでも守る」といわんばかりに。

そうだったな……お前の『理想』は正義の味方になること。だったな。

正直に言うと、お前の正義が正しいのかは、僕にはわからない。

少しだけ分かる部分がある。

大事なものを守るのに、捨てなくてはならないものが存在するのと。

だからこそ、お前は途中で気づいたんだろ。

自分の力じゃ全部を救うことができないって。

だからこそ、お前は決めたんだな。

1つを守るために9を捨てることを。

……衛宮。

僕とお前の共通点は10年前の地獄から始まったんだっただけ。
燃え盛る炎と立ち込める死の臭い。

助けを呼んでも助からない絶望と孤独。

あの事故からお前がどんなところで育ったのかは知らない。

勿論、お前が僕のことを知るはずもない。

地獄が終わって見たのも、また地獄だったことを。

だからこそ、僕は未だに『答え』を見つけれないでいる。

自分のことはどうでもいい。

あの時に死ぬはずだった僕に救いの手を伸ばした王様あのひとはもういない。

だからこそ、迷っている。

自分がどうあるべきか。

でも、衛宮。お前の答えを見て、少しだけ前に進めそうな気がするよ。

お前の『答え』確かに見届けた。

だから、安心していい。

約束しよう。

僕は、この聖杯戦争を止める。

この身体が滅ぼうとも止めて見せる。

男と男の約束だ。

衛宮が小さく微笑んだように見えたのは、きっと僕の目にゴミが入ったからだ。

* * *

…。

……。

……。

再びみんなに会うことができ、嬉しいはずなのに……。

俺の心のどこかで迷っている。

なんだろうか。

この迷い。

ナニカを置き去りにしているような……。

俺の大事な相棒……

□□□□……。

ダメだ。思い出せない。

みんなに手を引かれながら俺はついていくだけだ。

でも、なにか忘れちゃいけないものがある。

それは――。

――ウ。

誰だ？

――ロウ。

お前は誰なんだ。

――シロウ！

!!

忘れてはいけないことを忘れそうになっていた。

あの月夜の出会いを。

いつしよに鍛錬をしたことを。

彼女と共に囲んだ食卓を。

あの色あせないあの時を！

俺は静かに立ち止まる。

『?』 どうしたの? シロウ? 『』

イリヤが首をかしげながら問いかける。

「悪い。イリヤ。俺はまだそっちに行ったらダメみたいだ」

『どうしてですか？ 先輩。私、……』

「ごめん、桜。少しだけ、待っててくれ」

俺は桜とつないでいた手を解く。

「俺には、まだやらないといけないことが残っているから。まだ、そっちには行けないみたいだ」

それを見ていた爺さんは、小さくため息をつく。

『士郎は昔から先走る癖があるからね。今回も少し先走りすぎたんだね？』

小さくうなづく。

『……行っておいで。僕たちはここで待ってるから』

爺さんは微笑みながら俺に来た道を行くように促す。

俺は、なるべく後ろを振り返らないように返し来た道を走る。

今振り返ったら、彼女のことを忘れることになる。

それはだめだ。

なぜなら……俺は彼女を守ると決めたから。

* * *

「ぐっ……」

口から大量の血があふれ出る。口を閉じようがお構いなしでとめどなくあふれ出る。

瞼が重い。

だが、最後に俺ができることが一つだけある。

それは――。

俺は再び薄れゆく視界のなか、セイバーがいる円蔵山を背に仁王立

ちする。

どんなことがあっても彼女に手出しはさせない……。

例え、それが間違ったことだとしても。だ。

俺は……絶対に護る。

ぜっ……たい……に……。

せい、ばー……。

* * *

僕は、袖で涙をぬぐう。

それをしり目にキャスターは衛宮の刀をまじまじと見つめる。

「見ろ、ぐだお。こいつの刀。お前さんにはどう見える？」

キャスターが衛宮の刀を指さして僕たちに見るように言う。

「……疵一つない、収斂の証ともいえる。立派な刀だ」

「……そうか。お前さんにはそんな軟な刀に見えるか？ なわけない

よな？ こいつは、俺のマスターが生み出した。この世界でたった一

つしか存在しないものだ」

「……………」

僕たちは黙ってキャスターの言葉に耳を貸すことしかできない。

そんな状況だ。なんとも言うことができない。

衛宮の刀は、間違いなくただの刀じゃない。

王様の持っていた剣や槍などと、同じ風格をまとっているからだ。

「お前も何となくわかってるんだろ？ こいつはまごうことなき英雄の持つ武器。そう。一騎当千の英霊が持つ武勇伝、万物不当の英雄た

ちが具現化させた奇跡。それが『宝具』だ」

キヤスターはしやがんで、衛宮の刀の刃をそつとなでる。

「この神秘の薄れた時代に、こんなのを生み出すやつがいるとは正直驚いたぜ。主が死んでなお、風化することなく残るこの刀。こいつの曇りなき刃……。マスター。安心して眠んな、あとは俺たちが片付けるからよ」

キヤスターは立ち上がる。

そして杖を肩に担いで宣言した。

「決めた。俺はアサシンのやろーをぶつ殺す。お前らも異存はないだろ？」

「もちろん、最初からそのつもりでいる」

僕たち一行の行動は決まった。

* * *

正直に言うと、キヤスターを追いかけるぐだおの胸ポケットで、私は何となく察していた。

彼……。衛宮だったかしら？ きつと彼が負けた。

でも、この状況を見る限りだと、きつとアーチャーには勝った。

しかし他の何者かに殺された。

考えられるとすれば真つ先に出てくるのがあのアサシン。

黒化してなおも優れた気配遮断。それはアサシンがかなりの暗殺者であることを物語る。

言ってしまうば、試合に負けて勝負に勝った。っていうところね。彼は、勝算があるとか言っただけのもの、実際のところは勝つても隙を見せたのね。

だから簡単に殺される。

アーチャーは彼からすればかなりの強さだ。

それは普通に考えても、当たり前のこと。
ヒトは英霊には勝てない。

将来英霊になりうる存在だったとしても、あのアーチャーに勝つことはできなかつただろう。

けれども、彼は少なくともアーチャーには勝った。

ヒトは英霊に勝てない。という常識を覆した。

正規の英霊でないから、というのも大きいが、ただの人間が英霊に勝つとは、正直思ってもいなかった。

それに、宝具まで生み出すなんて……。

もしかしたら、彼はこのまま年を取っていたら英霊になっていたかもしれない。

だから、私は少し怖い。

こいつは例え勝てない相手だとしても、向かってくだらう。

自分が自分であるため。

あの地獄を生き延び、生かされたものとして、至極当然とも言うように。

あいつは、今。心のどこかで死に場所を探しているのでは？
と、つい考えてしまう。

この短い時間の間に、生と死を幾度となく見てきたぐだお。

あの骸骨ですら‘ヒト’と認識しているほどだ。

だからこそ、怖い。

私は、己の生を恨んだ。

己の在り方を呪った。

自分を陥れたフランスが憎かった。

でも、今ではそんなこと。と切り捨てることができる。

私のことを、深く聞かずにずっと一緒に居てくれた。

全てを失った私に手を差し伸べてくれた彼。

あの時は、私の為に誰よりも怒ってくれた彼を……。

私は——あなたを失いたくない。

私の前から、消えないでほしい。

私の思いは胸ポケットの中で握りつぶした。